和書門 類
二八五五八 號
九九 函
八 架
一〇一 冊

内閣文庫 和書
二八五五八 類
一〇一 號
二二 冊
一六 函
架

内閣文庫
番號 和 28558
冊數 101 (20)
函號 212 265

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

一老人の曰ク南部ノ書状ヲ入らめくりを書たる文ニ書ル也ト和ニ織田信長ヲ北
武切を以公方　霊陽院義昭ヲ
ヲ方ニ為ス信長ヲ感状ヲ用ノ
和田伊賀守惟政ヲ状云
今度国ヲ出ル不任日記ヲ東武雪天下一也南部再興ヲ
安堵編ニ於ケル外ヲ他様ニ為ス孝惟政ヲ申ス也
十月廿四日

明治十二年購求

回書

再ビ為ス軍ニ後ヲ来ル時
両筋の四級を以下上使八細川ヲ大補為孝

文織田弾正忠殿

右ハ古記ノ前ニ思ヒ合ル事ヲ以テ一段ニ書面為爰ニ記
一朔鮮攻陣の時毛利宰相秀元彼地ヲ功者ヲ郭中の侍士ヲ呼出し盃を揚ル時

たれこの些事に虚実あるべきの一の疑ハ完戸備前守隆家也一の疑ハ三刀屋豊後守
家和也二の疑ハ上杉古志清左衛門尉家の私の書ふかくて疑を有れ九郎
殿古志の名を元亨已ヶ孫の末裔引き出を云ふ作んとれ古志左の名ハ五郎
ヶ原なれども存ずる眼指を抜秀元て四て御先くき給と断る秀元を信玄
を押へ多人に一度て至を物を人の前成る古志の所を中たるの諸人称美し
ける

一後行ふく川亀之丞殿 宗ハ古旗本代流 甲州先方流家合相伝の者一人曰
川中島合戦の時輝虎三一騎まて信玄旗本へ突出信玄旗本へ突出
諸士数多有ると雖も輝虎を討ハ事何と其なる初廉信玄て是を白成
公の小書に川中島合戦て東所と云ふ有ふく信玄の旗本を上杉の旗本に突荒り
事所余押崩ふ処に八幡村と云ふ上杉の旗を宇佐之旗を多ふて備所しの
後金旗を又武田の旗本を突崩信玄の旗本が吹崩て如上杉東後迫数書
無誠に疑を入るべきの武田方数軍一時に撃川に崩れ人馬共に深み流れ流れ
信玄ハ川岸に馬を乗ふ処輝虎薙刀を以て自ら成
頭を包と二人斬の刀を抜て虎の面の如く黒毛の馬に乗信玄ハ信玄を
乗ふ虎を甲州の小人頭原大隅と云ふ信玄ハ信玄を胡簶(ウロ)を
のがれ多疑ふて虎突出て事せり
抜ふ也と罵ふ処輝虎強く川に乗ふ信玄ハ赤金ヶ切ふ三刀斬
ふ時信玄ハ冑兜扇に受ふ二の方ハ冑扇の柄を切折ふ籠手の
切ふ三の方信玄の肩を掠ふ処原大隅萩原弥右衛門諸共に輝虎を
敵ふ中ふ馬の尻ふ川の深く死ふ流れ流れ
信玄ハ是を逆ふ倒へ死ふを馬に乗ふ渡ふ川揚此時輝虎信玄ハ別ふ
然ハ初輝虎ふみ掛て信玄を打れ時甲斐の十三十人計ふ信玄の川中に居ふ者共を
見ふ者あるや是の智虎義て過ぬ此時迫ふ者と心を矢武ふ迫れ異打ふ月古時

西條信濃守川為堤て早瀬の走を射る如く流れを渡る云々中略て左右を顧ることもなく西條信濃守ハ輝虎を追て
馬を駆て敵を討ん也と彼の川を越て信玄の旗本を目懸て
今日の戦信玄の面目を時代代の通上杉家代の考れ之を
信玄の勇れたると云ふ 取分戦功を云ふ云ふ人の言ハ流石信玄ハ名将也
威徳者をおのれ左右を不扶国廟を愛されて侵也と若う中を中六年を
義田能を為ん所ん是を分進を出て分ハ年八名古屋通上杉家代の考れ之を
と常を元義 右の物語を聞て仍輝虎より勇と中ハ輝虎ハ
行ものと多信を元行ものの国廟を扶る而を彼ものみ切る信玄と左社を
右を扶ん出ハ中ハ左を扶ハ中ハ左を扶ハ也威徳者を多自此
今以不如と云 振来後ものと云ハ信玄ハ輝虎の時五の字 此代使者元亡
人形れ分義田に対して云 信濃川中島退ハ和田喜兵衛一騎也と言ハ多

退れしを馬乗の者を多付て致れ少分何義田云稲毛者 威徳ハ永禄三
年上州稲の城下ハの事也又合戦ハ些と梨ハ勇ハ退ハ云也 虚説也
合戦の翌日義光自ハ陣を年一 実也 時の信濃の書状世代流布中 無見
中ハ分一又武田典厩の首をもて切ハ取返ハ松ハ洪ハ敵ハ川中島
大合戦を三度ハ始ハ天文十三庚申ハ八月十八日の戦也 十七度の戦也 六度ハ信玄此
御上度ハ信濃信濃之右ハ弊川て信玄信濃の左右ハ此時ハ信玄合戦 武田典厩信繁
を信濃方の村上義清を討つ武田義此鞍役を尽て信玄ハ勝ハ也 是日
信濃旗本を破ハ義を義信を義信を引返る信濃を翌日
川退時 甲兵を討ハ三千百余人也又仏法二丙辰年三月 此の取信濃 能
原川を渡て信玄此年陣を近破坂城攻 一条上杉山内原を攻る 諏訪上原
山中勘助下を討ハ然ハ甲州の之戸神ハ 前後を攻撃に仍信濃の
兵川を後ハ引返翌日又上度の取合ハ五月七日 以上三ケ度の戦也と

反田物語也

一中國の探題大内義隆卿先陶尾張守晴賢入道全姜と不和に成陶逆心を多天文
辛亥の九月義隆を害し陶大利を得て大友宗麟の弟三郎義長と同心し
大内の躋を奪ひ大内義長と称し毛利元就に敵を取る陶の方々防長両國城と小茅丹後守を
勇士に差元両國名城なれども毛利方義長に用ひ怠慢せん物を仕
さへ陶方を羅ひ居られて藝石両國未同牒なれども元就方の
事を聞かしめ陶方へ注ぎ元就時を窺ひ自ら平
氣を為ひ彼督を賞し夜昼怠る所元就方に怪る限り
或時元就家老を集め両國の永茅此方へ内通の子細如何と問ふ彼者共の
少々早々陶方へ出る全姜聞き物に出られ永茅は体の者山口の明に来
り長元就自筆にて内通海賊の出状を調へ山口に遣を町口の者人共を捉る状
を奪ひて全姜へ差出の分改めて元就密々に遣ひ全姜始て永茅
丹後守を誅し長全姜と元就折変細と云て一戦を陶方敗軍して大将
玉川甲斐守討死せしめ也

一全姜大なる憤を生て大軍を催し押寄んと元就思ひ陶大軍に陸地を塞て
美作貢市へ乗船に平地を防ん便悪し殊に要害と思ひ揚尾一城なれば中
利を得ざし又敵義長に大軍と云共皆を取出し宿陣に乗来る
船は空舟に火を焼五は宮浦の敵に船を通へ殊更
兵粮なれと全姜を武士思ひ不可叶と云て行ざる全姜を宮浦に偽り出
料等を元就陶の使来き恨なき之婆藏人新里右近丞人を宮浦の小濱の端
に出陶を偽り人の為也元就偽り軍議を云全姜今大軍を殺して安
元就は美作市の方々者ども出し日頃此方を重立ける敵大軍なる
切猶ん可必とり若宮浦に成ん時方の敵後ん いかゝもして美作市方

掛り来らハ岩国ニ至り弘中三河守ハ陶方へ内通あれハ寺仏便宜よしとて三河守全薫ハ
元来御方なりしかとも謀を以て退路を悔し陶方ハ十逆す全薫是を
信し云ふ陶方と欲を弘中三河守と出して云ふ陶方ハ謀りあらハ味方也と取りてし
出陣(?)市へ寄せられし陳を全薫弘中を招て是を用ひて一度ハ日本
随ひ已に要新里ヶ宮尾を攻て危角云ふと志て弘治元年十月廿八日
二万余騎押寄せ人数四万余なれハ西ハ陸路東ハ大野与倉寺
文の前ニ大船を掛並べ一度に陸へ上り經藏回廊並に天神大黒堂寶の
以前塔の岳山迄ハ儀浦中麻薬師芦山琳直寺に充満して小浦の城を攻兵船皆
余艘吉市の方へ押出し元就の後陣を待ツ元就此度ハ十死一生の軍に定め吉田
城を打立草津ニ陣をとる其勢僅三千余騎石見の吉見安藝の熊谷兵庫頭天野隆
重阿曾沼・・香川刑部大輔・・合四千余騎草津を打立三里押て地乃
以前火立の浦ニ着く頃ハ十月廿八日軍令を出して曰押前押後を定け二行三行ニて
兵の多少を見せ・・廿九日ハ火立の浦ニ陣をとる宮尾地の以前の社ニ毎日
給舟ニ乗て宮島へ渡る佐伯(?)乃元就社壇へ人を此神主ニ仕立浄衣
立烏帽子を着せて云ふ陶へ渡しけるに陶ヶ兵共是ニ向く元就方の様子を問答
云陶房(?)草津ハ吉市へ出張して味方勝利成へきに此佐房こそ毛利家の滅亡
あれとて元就火立の浦ニ在てあらかれ果明かの草津引退へきとの沙汰まて其
然に陶方ニハ仰けり元就潜かに軍法を定め其日一組五百ハ混用て洲崎明神の
前ニ寄て舟ニ乗て大峯北以前ヶ多宝塔の前を通り文濱の町尻へ出張し但洲崎
明神ニ町はつれ三里余も目当て押入て一組ハ吉田郡山の仁人五千余元就の嫡子
隆元を大将として御山ハ取上り奥の院休堂滝の前坐に陶か本陣を舞翼
ニ備ふ山上の陣ニ炬松を法ひ仁人五千も炬松二て夜半の鐘を相図として
一度ニ火を立鉄炮を打立鯨波を揚へし一組ハ吉川元春ニ武者舩百余艘を付て
海より出し浦々ニ掛並陶ヶ舟を焼立海より攻登るへしと軍令を示し晦日申刻ニ

地軍へ合て白川日向陸奥引れ一し人夫小荷駄ト人馬ニ行列を乱さず川越し為す捌
の為に小船ハ元就ハ今宵大至此浦ヲ逗留なして翌朝二日の兵粮を
皆揃へ仕なと持へしと此浦ヲ出し日暮て漕ぎ乗り元就ニ会ふ海ヲ渡し
各々舟出し糸舟を仕て皆書付を以舟を組て人馬を乗入ル角を焼くなれ
元就ノ船の挑灯を目当ニ大至の浦地の沖を乗出れ打出大海
大風ふく雷電山ヲ崩し波涛雲ヲ沸き時ならぬ波海を荒しと云も小風
なれ宮島ハ順風ふく乗切し玄海の西北浦数角迄漕て陸ニ
船ハ一般も球ハ大三浦に帰し事士卒ヲ必死を為て陸ニ上る時敵兵を呼出し
海ノ陸ヲ宮島ハ引出し今取大利を得て海中ニ沈めける陸元ハ
軍兵二百余人夫ヲ人ヲ捕ニ仕禁ノ十八町の山之伊予北の
舟ヲ能得ハ海ハ天就ニ加勢して宮の前ニ掛る陶ノ番船を切取て岡を
陸元ハ父元就の父ヲとして雲公掃部頭同右京亮赤川十郎右衛門三郎
千余ふ馬ヲ元就本陣二子完戸隆家福原越後守陶ノ軍ハ
去川元春ハ洲股ヲ上て押寄る毛利隆元て能答上る天聖阿弥陀寺ヲ
従へ海ヲ掛ふ巳ノ一同ヲ岡を乗て仕山の麓ハ松の影ヲ焼し大筒を打岡を
合ふ戦を取陶ノ軍勢能を潮の上ヲ石ヲ撃れ大ヲ岡ヲ倒ル者ヲ
防ぎ戦ふ小早川ノ兵ヲ掛ふ敵船を焼ヲ崎ヲ上る元就旗本の
登原垣井福原波多飯田中村三戸三宅児玉等ヲ進く敵ヲ切崩を去川
元春完戸隆家福原貞俊志道中務入形て多宝塔の前ヲ横槍を入逆ヲ陶ノ
大軍を切崩を陶方三浦戦中ヲ小百余ふ入形ノ荒ヲ小早川隆景三百余ふて波
早合戦中ヲ隆景槍を合槍ト戦中ヲ実伝ノ内義元下合て三浦ノ前を
取ル去元ハ三浦ノ兵能く力戦を仍小早川ノ兵井刑部岩井二郎内義九鳥元
山源助ハ弟ハ討死を赤川左京亮ハ手負ふ槍を入三浦ノ兵を突崩を陶方
弘中三河守同中務三百余ふ去川元春と戦三ヶ所を崩を人数不残討死を陶ノ

本陣も散々に敗北を見て内義元帰国す五十騎ばかり陶方明石越前守内お屋三十余騎にて山を出でを石見元門包囲す敵方散々に成て八月廿日全義八敗兵を集め五千余騎にて山王宮に陣を張元就勢を一手に引て出を攻る全義と義隆を捨て防戦し卯刻より申刻迄十二度の戦に双方共負死人員を知る全義は手負て博の岩くり退自害し給ひ伊賀氏新山湯迄は下人自害し申アを深く隠し名を亡滅の跡を追て元就八四千七百八十余人の首を切捕八百五十余人也其外岩方芸海に溺れ死る者数を知る人数九三千余人の首を切元就を見て内義の首を捜し集て主君義隆の仇を報しもる十一月十日上宮房に陣し諸堂を焼し更に小方に陣を移し防府山を攻んと支度する蓮花山の城を坂東右衛門尉降参元就被官山の城を乗る板谷を討果し防府山を攻平げ翌三月玖珂へ陣を移し周防国を手に入る四月朝日ヶ山の城を攻る内反隆世を討果し長門の国府へ押渡る大内義長陶安房守同じく市一戦に手負て福寺へ引籠る元就是を元囲使者を大友宗麟へ遣し公家義長を立て遣す但一族助安忠之介と異て其後紀伊守不和し而大内義隆を殺す義長は元就を敵として大友へ遣を天正十五年大友方秀吉公聚て秀吉公子長門守忠猶を立て毛の方和睦を成て上杉中務大輔ハ子長門守忠猶を立て毛の方和睦を成て上杉弾正と号忠猶逝去の御子を為て方に成て毛方へ帰を仕て毛方へ帰宅卿中務卿利幸逝去の後毛方へ帰宅を仕て毛方へ帰宅卿隆房と云ふ時毛方へ帰宅を仕て毛方へ帰宅卿一揆元就を攻る時城を別和山三郎長治家人中村市郎忠猶と云者の

方ハ秀吉公谷大隅守好を使て内府の事を勧る中村彦て同じく忠仁娘を
人質ゟ出し伝時ゟ行〳〵秀吉ハ人数多余人城中ハ引ゟ踊を換〳〵一人も
殺〳〵ず果て秀吉大ニ立腹メ人質を磔罪ゟ成三木落城〳〵中村之帝ゟ
引渡不応色〳〵ゟ行れ丹波後詰の奥ゟ掛出ス秀吉公曰三木ニ於て多ゟ
完竟の者ゟ不能人を討ゟ手ゟ成ゟ也ゟ飽ゟ主人別所ゟ為ゟ恩ゟ乃
女を捨ゟ忠ゟ最切也ゟ成ゟ中村式部一代ゟ手力ニ付三子石を物時の人
秀吉の裁判を感ゟ位傍の人評〳〵ハ中村娘を棄ゟ忠ハ純粋ゟ丈ゟ
義理ゟ後の仕形ハ奈何と難ゟ実理ゟ也
一近世ゟ名の士を挙ゟ〳〵三騎坂三勇ゟ為ハ五兵衛と呼ハ謂三騎ゟハ上杉謙信家ゟ
宇佐美駿河守定行武田信玄家ゟ馬場信春毛利輝元家ゟ吉川駿河守
元春也三勇ゟハ石田佐渡守浦ニ成内板江勇ゟ情四中ゟ成ゟ浦内辻勇ゟ為友堂
和尚ゟ内後辺勇ゟ為ゟ成ゟ毛利家ゟ浦ゟ郡巫家ゟ為ゟ密川家ゟ井伊ゟ為ゟ浦
也改也
一缺唇に勇士を上杉家ゟ内川田豆州信親家ゟ人本田豆州正房武田家ゟ
山縣三郎ゟ為昌家福島正則家ゟ長尾半人佐一為ゟ缺唇皆世ゟ名ゟ大剛の
士也中ゟ長尾半人ハ元ハ山路久ゟ也と云勝頼ゟ為ゟ友ゟの旗ゟ也ゟ長の城を
出て父ゟ山縣ゟ為ゟ云北伊勢ゟ〳〵頂れゟき勇士也ゟ為ゟ家ゟ〳〵一万石を領し
安芸ゟ為ゟの縁と成ゟ或人云半人ハ作ゟ為ゟ綱ゟ後孫ゟ大兵大力ゟ多ゟ十幅一丈
の四目結の白布の旗物〳〵一間ゟ長出ゟ浪の如ゟ迷月を出ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ時ゟ〳〵ゟ
原ゟ陣の仰此半人を士中の人参也と為ゟ家ゟ云ゟ稀ゟ人ゟ有ゟ〳〵ゟ半人孫ハ義乃紀
ゟ絶家ゟ〳〵ゟ長尾出羽ゟ云半人ゟ事ゟ長尾勇ゟ為ハ紀伊新宮ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ子
久ゟ帝ゟ〳〵ゟ紀ゟ在ゟ云
一小田原落城後秀吉ハ出〳〵奥州勇ゟ為ゟ〳〵ゟ強盗ゟ見物ゟ為ゟ国ハ後ゟ
ゟ為ゟ伯耆ゟ為ゟ出ゟ〳〵ゟ南ゟ北朝ゟ為ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ仕置〳〵ゟ為ハ後為ゟ〳〵ゟ為ゟ

微なる身を以て天下を平らし四海を掌握せんと欲する者多し
清和源氏なる王子を始め遠流に殊に於義家東国の守護として流人を列侯
源氏為義朝も関東を領し代々の家人流人を以て義兵を挙げ等しく関東に属し天下一統の為に家は早く滅亡
氏も東国に手を分ち孫を天下に取る所以義を切伝れを以て所と
永し天下友を以て敵とする故に活機の大将し
一織田信長公八年義昭を奉て思惟しかるに尾張は四国の要衝
行幸上方に御せんと欲を変て摂津合戦の聖旨永禄元年正月偽て能登
義輝も第一近臣僧八人を具して潛に入洛して京師の人数を家臣に
公方八代氏なる十三代光源院殿義輝之地武権を奪て当時病死し
嘉永次第歌高に幼少なり細川晴元の家臣三好修理亮長慶なる者播磨芥川城
押たれ三好方細川氏御同族長職に居なれども名代として諸事三好の傳を以て大切成敗し
仍て信長就京の様子を見聞し先角南方の
みなく三河三好八河国を領若江の城に住す仍信長為の幣の使として
町人の家借り三階の楼を設し織田西国を見渡し天下を望る工夫なり
京を本国八元来信長と云事八家名なれ共仕事の旅人の逗留なれ共思所
粤より五畿内無反義我八信長の御坐なり高不利なれ共信長と雖之を事
仍て信長の為の巡行を少伴大に喜び宛意の折や信長を可討と逗留十二
人を給て旅人に住宅の清遠し寄よりを嫌へしも信長少分く彼討の旅
宿に押寄の八渠肝を消て用意なるを信長方にも之を受て既て已に
家を付を給へと少し之借る所の如京小て成敗せんと謀元を給り怒る甚
節い偏に全所夜叉の荒しなる如くなる歌なる議場を工て安堵遁敗し信長八
文分河国を領城に住き京ノ士を以申入られ八渠八織田信長に尾地代年貢を
三好家に進上う彼の右代地を織内なる場度に山城容なるを以て家譜代の士卒

又子余とも三好家の臣之者を下たし宜しからぬ共あれとも信長公ハ名有る勇士也
而かも其任せし渠ハ味方なれハ意志なからん事をも打出し仍て柴田佐久間諫之に信長
去る桶狭間の合戦ハ未た夜中思ひ立ち彼不行唯人ニ無恐ニ是ニ同し給ひて却て猶の
根を捨られしに是より後ハ年経ハ又信長ハ謹しみ尾張を取りきしとて
一　下総国飯尾の城ニ上杉改押寄られ付人数を押へける其道山道海辺ハ潮満
ぬ時ハ山麓を行ハ敵方ハ山上ニ石弩を備へ動ても人数を損するに至る故ニ改
ます事ありて人数を停め潮干の時ハ山麓を除きて遠干潟を押廻りして作(モノミ)候(ヤ)を出して見んとて
ニ見切急度有る時ニ定改の事に太田持資入道灌を召集めて
出し閉して改めて潮の干るに急ぎ人数を可押と知らせ事人数を不知ニ出し果して
潮ハ干るに遠干潟を安く押通りぬ定政曰其ある事潮満て潮の満干を知りて
いにしへ向ふ所道灌かゝる遠く事とくある此の詠御部ありて潮の満干を知る事中古
歌の道より多くの事を聞えかる潮の干る事をなか書てハ道灌武士の賀上手
歌人を嘆ある名誉也と云ひし御の歌に潮の満干を知る新古今集ニハ小歌
御歌にも近く鳴海浮むて自ら汐やミちぬらんと見え鳴尾ハ津の国鳴海ハ尾張之
一　信長公天下を知る始メ三好長慶の方にて坪内某を生捕りて十人の事されを誅戮に及
放し因人ニ申て四五日も居る智の修理亭を信長の御賄人菅谷を以て申付らる
因人坪内某ハ三好家の料理人鶴鯉の庖丁人なり七五三の膳部を作り公方家
の法式不知といふ事なし其上子供二人ハ先達て是を事なれ候ひて仕り事なれ候ひ
に遊ひ料理人ニ言ひ付られて何ハ菅谷に申付らる料理中付試との御事
之晩の料理を坪内某を勤め兎取しく膳を上る然ルニ料理は宜しからす
以の外に思召し仍て坪内ニ申付られハ坪内某り候て明朝の膳を今一度仰付られ
それる由し申されも思召ニ不叶ハいかにも仕る様の放役ニも仰付けられ菅谷お伺ひて
其也ニ仰付らる其時梅宮某兎角云々彦信長公ニ機嫌よし坪内ニ仰られも
坪内申さるハ初の料理ハ三好家の塩梅にて候ハ是ハ三好家ハ五代通の塩梅ニ

仕立ハ三好家ハ筑前ヲ弾下ヲ当ル基 修理亮ヲ茂ル系亮戦徒
之ヲ代ル家の流儀ヲ倣ヒ一刀流ヲ敬ス家風まて科紀抔も花車風流の事の
ニ坂の場抔ハ四会風ヲ仕立ル所ヲ入ルと云少人信長ニ取侍を無ク
笑ひ合ヒ

一濃州鷲巣合戦信長云勝利を無度竜興ノ家臣稲葉又右衛門大剛者を討ル程
池田左京亮と作右衛門ハ前ヲ首実検の時為人を討ル者と知ル
作ハ池田ノ高名と中池田ハ作ニ高名を譲て不決大抵人の取る首を為ル名と
争ハ多ク是ハ互ニ功を譲合ヒ敵別場所ヲ作ル事ヲ信長不興の
体を作ル為ル今時義ヲ云信長の心ハ人物を見て ヲ出ル中ハ首為人ノ取ル
有ル作ハ池田ノ中処望ヒと云信長ヲ伏ヲ為ヲ酒盛ヲ作ル
ル人ノ取ル首の多ク落ル瓜抔の如ク首の幕ヲ落ヒと中ハ前の小性
瓜ノ如ク作ル者ハ信長ヲ感賞ヲ

一豊臣ノ時分ハ武功者ノ者ハ免ヒ家康公駿府ノ城の御
小姓衆を大名ヲ作ル付ル長大横目成ニ右衛の槍禁制ヲ為ル事ヲ持ル軍ノ
可改ヲ作ル付ヲ長ヲ成ル事ヲ網川城中ノ所場近ヒ事ヲ当家の槍ヲ持ル者
衆信の役人と見て菖蒲幸の立付中ヲ供ヲ三十人計ヲ連て毎ル横目成見
始ヲ名を向ハ細川城中ノ内沢村寄と名ヲ付ル事ヲ後ハ事ニ成ル事ヲ
家康公河内ヲ大学ル者ハ若紀時ハ方八と云ル事ヲ小牧陣の御右衛方ノ二ヲ場ヲ紫を
掃日根野備中ノ兄弟木村常陸介神子田ヲ加賀遠ノ者ヲ外大勝籠ノ者
函ヲ久ヲ多ク稽利を得ル事ヲ成ニ太閤様の外ヲ弱ル成ニ城を持ル者ル
明退ヒ一ノ所と方ヲ成ル函小牧ノ中出て付暴ル者ヲ右衛門方金ル
ヲ塚と云所ノ伊ヲ立彼岩の人数を引ヒ所ヲ為ル人数を退ヒ仍右衛方級
軍ヲ此時細川ハ右衛の之ヲ為ル我勢を引ル鞭上村彼沢村一番槍也ヲ伽眼
前ニ功を見及ル加藤の剣の事持ヒ為ル外の軍ノ皆来玩槍の槍を制ヒ也と

長沢村に上を傳兼ねきるの身を偽り細川も恍惚不斜ものも

一木村を住分銃砲大将東行列にて手色を持槍を
塀の板の皮を剥り鞘抜落るを見れば手多猪り常座分を少く不無して彼
相撲を吟味し士の扶持を上様に強し動多不人色子等也永持槍を凡ても元等七
鞘をとられば同長強り常座もあきれ減しもぼて大名扶持に強るの影
の如し身者扶持の上へ切と色ん切と色ん切と色ん切と色ん切と色ん切と色ん
多笑め

一細川三斎様上北扶柄に強も京師吉田の宿に元等教日逗留を御鳥九大病を
元度の許へ振上に寄に近国の侍家臣使者三斎の師を迎て
寄る学習を一別之為に相教考〳〵扶長の使者の上北敬し三斎様〳〵習
の法文を書く使者に渡る其版に立物水牛の角下地桐の木し有使者を熟ね
見〳〵申分を主人相毎に長を入る生質これに書面より下地桐の木と遊び聊
不審に寄の如〳〵武芸に強り上も強く相を用いるなく桐の木に物を南と
扶安文の上に此限西之に及西に方心悩を同に長級器を長人に少七変に
寄〳〵三斎士矣四〳〵の立相〳〵新に扶安紀〳〵に働く時物を盗りもぐれ盗人を
扶見て行をれの扶扶也三侍使者押返て長に容易扶も上て扶日如何と
中三斎に長の戦場に隙を後日を期るのにあて是を武の法古人に強〳〵
鞘を僅の立相の扶を厳紀の心〳〵二法に長の思業に〳〵せん働て立相扶
に扶乃の敬無し長に扶毎に扶に代り方〳〵に扶に使者閉口して帰を
長坐に居る人扶日に語也

一天正十五年聚楽様諸侯能し長〳〵に福徳を天下の諸大名地下所人に有を小旅
面を長〳〵に中に日根野織部正に市置を上に子利休に石燈籠を上る右の置の立相
〳〵根の谷月也利休に上る灯籠の火袋の窓も谷月に二人に武を相扶一人に茶の
相好に一致せし玄学妙也と世に波伝せしとや此置に大坂落城の時焼失せしとや

生駒家内ゟ病相煩て八月の末迄胃の後口ニ五月三歩一ツ宛ハ胃ゟ出れ二ツ宛ハ
胃を越て出ル中ゝ又事実を物也と語られし
一加藤清正ハ士卒の酒飲ム嫌ハ也と多家中上戸を撰て坂川忠兵衛ハ初ゝ上戸
成ハ一滴も飲ず下戸成ハ料理を物支を坂川ゟ右の振ニ玉庵
と云医を並坐しゐる上戸ゝ酒を大杯ゟ受ゝ猪の振を立ル処ハ清正
杯ニ酒を志ゝ玉庵杯ハ立ル盃を清正ハ立て盃を清正ハ有侍
坂川ゟ立て人ハ盃を取て一盃ゟ清正と飲ゝ場ゝ他の盃ゟ知ず面
しゐる清正ハ角の挨拶引出也
一関ヶ原陣の砌清正同国宇土城（小西摂津守ゟ苗主ゟ奪し）を攻て或歩清正曰今夜ハ敵撃
を入一沖ゟ入ん と今を果しゐる夜討ゝ共待設ゝ事ハ其日新
子助弘出一番槍を合て坂川忠兵衛し禁酒ゝ待居しゐる子助ニ続ひゝ槍を合
ゟ清て伊達新左衛門角助井村長右衛門山田を帝ゟ槍を合敵ハ不叶敗ゝ退
坂川忠兵衛ハ敵を慕ひ行ゟ敵門を入ゝ引返ん とせしゐ立ゟ
ゟ強ゝ手ゟ疵の血ゟ門の扉ゟ手形を押ゝ坂川の関歌の事ハ成れ血の色安
定ゟを若汗杯ゟ有ゟん れ吏ゟ安ハ安槍ゟ又立後ゝ門扉を十文字の槍ゟて
少し削ゝ坂ゟ実ゟ坂川ゟ信軍田中ゟ助を上戸ゟ宵ニ敗ゟ傾を武具（ミノ）しゐ眠
居しゐ関存扶施の方ニ目を覚し槍取ゝ出ゝ敵ハ引ゝ出ゝ敵ハ引ゝ
ゟ引敵敵も討ん と出ゝ出ゝ敵ハ引ゝ出ゝ敵ハ引ゝ
成れ成ハ散ゟ敵の城ハ取ゟ立ゝ急ゝ坂川声を掛ゝ物別れ
あゝて尺ゝし武者柵外ニ一人残居ゝ今夜敵討の物ゟ板谷助と名乗処ゝ田中
を付ゟ槍を合て板谷十文字の槍ゟ兵助ゟ左の振を掛ゟ立ゟ向ゟ板谷ハ
本戸の内ハ敵入門を打故て兵助ゟ引ゟ其敵清正の前ニ今夜答を合ゟ又六
人の者共ゟ清正槍を乗て手疵ゟハ甲冑ニ当ゟ弓箭の痕を検ゟ時ニ田中兵助
を出て今夜の一番槍ハ拙者ゟ清正能ゝ改ゝ虚言を云ハ一番槍ハ日下新

与助ハ坂川忠兵衛と成ん子細ハ手助左衛門を見よ具足の胸板冑の揚ニ矢三筋
射付けり弓ハ鎗前五間七間の間ハ鎗鉄を射る物也拙者ニ成てハ弓ハ射られさる物と
与助忠兵衛か甲冑ニ矢を請れハ一番鎗ハ疑ふ者なく人の内ニ必定なり左衛門か申状
信用し難しと叱られハ兵助血眼ニ成て是ニ覧よ鎗手を負たりと云清正是を
近寄せ能く手疵を見て鎗手ならハ左の鏡の外右ならハ鏡の内なるへし於爰ニて
左の手ハ外の方疵深く内の方浅かるへし然るに此疵ハ外ニハなく内の方ニ有れハ鎗疵
にあらハ有合し己か自分ニ切たる物ならしと悪口せらる兵助怒て涙を流し拙者か鎗の
胴手ハ白紙四半比腰裏としたる鎗ハ十文字冑ハ銀の蓮を己か手の主ニ揚ても宜しく松本
次左衛門と名乗けれ只今ても此儀相いニ成けて其時ハ知れ申すと散々ニ罵りけるを小姓
等閑く其咄を云を後も後十月七日小西摂津守行長か自筆の状宇土城ハ到来
其頃ハ行長か九月十五日関ヶ原表敗軍し黒田長政ニ生捕れ早運命尽て
十月朔日最期ニ究けれハ宇土城ハ可明渡し可申との書状ニ依て同八日城代小西隼人
切腹して宇土の城落去き其後小西か家来大形清正方へ召抱也中ニも松本次郎
助と呼しか先月廿二日夜討の時柵際ニて彼方と鎗を合せたりと云者有て
是也松本聞之門口の時並くハ似得たる一人付来外張の篝火戸口にて拙者と立場鎗
と合十文字にて彼者の左の鏡を掛たりて仕けれ扨木戸を押て一夜明て見へハ十文字比
鎗ニ血付有之けり其者の冑ハ如何にも烏毛か黒熊の引回しを附たり毛並を持けたり
然ハ田中兵助也清正是ニ兵助を呼出し手柄の程兵助誠ニ忝く神妙なりとて加増五百石
然偽ニ兵助不快して其後一筆を残し熊本を立退く其頃ハ関東浪人と
只今と致すとて世の聞ニも兵助か当回ニ此度の増ニ本地を添返ると伝へし書を史より
池田三左衛門輝政へ仕へたりて其後ニ大勢を兵衛を討果しきたりと也ん此兵助元ハ
盗賊にて強盗の張本津国の士兵衛か小性也石川五右衛門か窟数ニ従て時獄屋より脱け
出し途中見物群を成し兵助是を見ニ捕れ五右衛門を戒め縄ニて走
寄て唯一打すしくいらし五右衛門庚日頃の芳情を報ひ於寸志にとて呼られハ縄目の

見物群れ騒くこと雷光の如くこと場を弘抜を仍傍不知老者の所仍如此不敵也しかるまた右一番槍の日記子助ハ後ハ細川忠興ハ佳人清水伯耆と名乗
しハ此子助歟也

翁草巻之廿七

○世諺源義経奥羽高館ニ死セリ真似シテ蝦夷ニ渡リ蝦夷人義経ヲ敬ヒ神の如し後世ニ至テ彼地ニ於テ祭之ヲ崇拝有リ如し

金史列将傳曰（金史別本）箭車国大将軍源光録有。日東陸華山椎冠者義行子也。始入新靺鞨部。為千戸邦判。身長六尺七寸。性温和而勇猛才思甲諸部。外夷多隨拜入学館。辨礼義。後迁咸京録事。章宗詔將光録太夫。累仕大将軍。久守箭車城。押北方。往昔椎冠者東大洋藩君。章宗顧享賞。定總軍曹事官。令入北鑛。不日破蕎敵。得印府。飜来属幕下。築箭車護要。頃侵北夷。渡龍海。得一嶋。山河秀奇而悉金玉也。民知霊霊草。火食五穀。屠生肉甚嫌。故無初煩老仙伊香保行。辰行本命法。儀相無異。怪德勝故人。義行既振。多敬得長壽。後遊中華。隱見更不定云

義経高館にて逐倉の脚を悼り義行と改名を一説に義経違勅し度ハ時の
摂政良経公と和泉守通親を忌多義行と被唱と云
按ルニ中華の小方ヨリ女真国（女直とも）有り中間ヨリ契丹国乃り宋の徽宗政和五年（本朝七十四代鳥羽院永久三年ニ当ル）乙未女真王阿骨打ハ帝と称し国号を金と号金此時分勢い熾ンニ成金宋の境ニ寄契丹国を宋と牒し合ス〳〵討滅し支分宋を攻侵し多宋の於く攻陷靖康元丁未冬（本朝七十五代崇徳院天子）宋の上皇天子を生捕て金ヨリ送れ終ニ宋ハ都を攻落れて徽宗の子康王と云を取立南京ニ於く位ニ帝を高宗と号宋の地ニ居ハ金ハ入れて南の方ヨリを宋ヨリ多分を事家ニ云支六十四年を経く南宋の孝宗淳熙高丁未ヨリ今の〳〵雍死ニ其子金の多二代を立早宗と云義経の高館没落ハ文治五年乙酉ニ支分ニ成ハ、越られし事ハ金の地後ハ〳〵一名を毛人女直と云金乃名を女直とも又真とも云也義経ハ成ハを位ニ〳〵而ハ金ニ対章宗ヨリ任し候

仙台前巻ニも記ス〳〵今の清朝の天子ハ義経の裔也と是怪支説ヨリ以れ共時分の
消息且ツ年文の伝拠と事ヲ考ルヨリ全く偽ニ〳〵ハ不可有れ根源動を後而已

義経外考編ハ後ノ支説ハ和朝ニ傳ヲ
条勿論ヨリ頗ノ異邦ノ傳ニ倚ヘシ

○楠子三代ヲ太平記王代一覧後年記ハ其外書記ヨリ出の楠氏の遺書抔と云
物ハ皆ハ虚偽ヨリ出ル支実の粧飾を不知ハ水戸西山ヨリ出た計ハ穿鑿ヨリ〳〵大旨を
参考年記ニ著し候ヨリ而已也又近世ヨリ年記細目大全評判抔と云ハ涯書を以熟図ニ
評の可否ハ閑之年文の全篇ニ悉く傳を付て其説を解く其傳と称ヨリ人何も
学術を揚ハ記ヨリ〳〵ハ好支の者ヨリ対ヨリ想像て妄ニ巧言
ヨリ〳〵紀れ今是を講ヨリ支ハ書総目ヨリ倚て秘ヨリ故ヨリ〳〵の人を支実と
ヨリ聞之ニ就中楠子の事ヨリ書ヨリ実ハ事ヨリ〳〵ハ出ル後ハ面白き
事ニ三楠実録と云ヨリ総目乃抜萃ヨリ事ヨリ〳〵於く異ハ事ヨリ正成正行の徳行い
不及中正儀ヨリ南朝の盛衰ヨリ裏又其身ヨリ子剣を潜作の折柄京都将軍ヨリ河泉支
国〳〵を大和伊賀伊勢を并ヨリ〳〵ハ国を湯武ヨリ〳〵ハ武家ヨリ〳〵ハ細川新之ヨリ様ヨリ事と金

正儀家乱僻死し、不容幾程を、病死と甚子次帝正儀、明徳三壬申年
百一代後小松院 御宇
亀山天皇より破壊を抜て夫合正儀十ヶ月の内、遁世し 此年南帝降三種神器 吸治
皆を捨て坂西猪俣正元と倶に落ち、将軍を頼み処、支藩乱し、正儀十八人
一族、四三家に於て討果され、楠氏の系義に至り断絶、吁惜しむ
正儀の男子、池田教正と云、母無拠侍人、内義、参議封清貴卿の女、正成始此女を正
儀に約て、後妻嫁し男子を産む三家、早世し、其後正儀、封死の後、彼婦姙身を
而に清幸、武心有り、高武義に属し正儀を不義を怒て、彼婦を清幸に妻
敏て故、婦人、河内国池田九郎教依、再嫁し、姙の男子を産む名将の流せて絶父
教依、参て参り、七家、元服せしめ、家督を若家として、池田十郎
教正と号、後の細川氏に属し、池田兵庫助と号、武功有り
騒壇、龍説曰、建武中興の人物、多い、繕伸、義の義房、鞍谷、義の楠正成、
喪郷の駿、拙の小川も、張り、甚人品をいう、義房、及び、義房、竜馬の諫、直言極諫
日録の駿、拙の小川も、張り、甚人品をいう、義房、及び、義房、竜馬の諫、直言極諫
朝廷を肇、動て、正成、綱陽の風雅と云、紀伊、正成、疾復の功、並び、強し、其上
義房、一諫の後、国を去り、世を遁れしが、正成、其身、国猶、死の、忠義代、家
伝、天下、乱の時、能の、正成、人を、仕、正成、外の言、世、伝、
其為人、委、変、幼れ、仕、世、楠家の、書、きれ、流布、物、多い、後
人の偽、仕、紀、其、表、乱の始、一、を、天下、乱、始、義
挫屈、強、材、たく、男、思、殊、仰慕、天下、一変、裏、間
名将、勇士、時勢、例、を、常、朝、多、中、独、楠家、子孫
累業、訓、一門、国族、心、壹、力、戮、身、国、報、三代、間、一人、
貳心、不少、比、正成、徳沢、深、永、人心、強、事、
争、如、彩、故、紀、世、尚、人、捷、諸葛孔明、比、人、何、兵略、
法、無復、諫、父子、国事、死、同、也、丈、去、孔明、卧竜也

道徳を懐抱し功名を世外に求む一生を終んとせしに不図に蜀の先主の三顧
を遇く不得已して出仕し一切実績を上て立て君臣魚水のごとくなれば其出
処伊尹呂望に近しとなん古人の評も有て正成いまし功名科中の人也
後醍醐帝笠置に幸し給ふ時の時を聞の名士を徴し給ふ向正成も是を感じ奉て
出処孔明に大に異なり上帝後の後も是氏義貞の下に列し専に任用なし給ふを
不少孔明をして撥せ忍しく其倫に比し正成の敵を料り給ふを用ひ韓信に似る韓信
を以て節制の兵を与へ給ふ論ずるに正成の敵を料り給ふを用ひ韓信に似る韓信
楚に妻食を与へ時の既に項王の易制を知り正成河内に家居し時の既に強倉の易
弱を与へ給ふて韓信を任じ給ふ項王の事を行ひて天下を分ち給ふ
事を以て正成　後醍醐帝を謁し奉に謙倉の強きを行ひ其強きに乗り
多くの敵を破り其後多人に多く策を用て取給ひ支掌指すがごとし韓信
叢沙背水敵を破り正成も河屏木偶敵を摩し給ふを見給へ多人の兵を用ひ一徹に
也ふかい行まも摧堅拉朽と云て韓信の林を敏速にして攻撃其ものを不
問正成の打て持て多くて打て来る其攻を見て韓信の様を考しめ給ふ
正成の如く成んれ正成の敵を攻しめ給ふ韓信の如く成んれ古人と攻守勝負と云
いて是も翁が論ずる決定なれ也とて韓信が兵の利欲の為ひ
正成の兵の忠義の為ひ国家の為ひて是底倹の心を以て同しからん昔河内北
人の説ひて或人翁に云ひ今朝の内の所と号る祠を中坐
を正本とて左右に孫子呉子也正成常に天下に武功を立ん事の為ひ孫呉の
云しにて是を祈祭すとて是を今の正成の武にあるを考へ
他正本に比て絶倫の材をもて聖賢の道を学ひ孫呉の術を学ひ崇ひ
眼を以て濤川に自教ひ給ふ最正季と最朝の一生を潔き甚酒　正季楠家ノ系
図不見ト太平記
細目ニアリ
私曰正成の最朝の言を鳩巣先生の酒ひ給ふ太平記の評及仁正録氏沿革之余

覺寺実記等に多人を採り編者の文華を飾るに勝れて却て其人を須
臾半多し 愚按正成血戦の中に帷幕を帯び最朝を案じ血戦忘劇の
中にて誰か此語を少々後世傳へ来り海内の老使再を繰て動とのみも
詳に故郷へ傳えしや孰日て其説を得れい評論に及ぶ紀氏鳩巣の説雖し
上に深きるを正孫に此論有るを云て少々不審也

私曰世楠三代を称し正勝を不云 正勝乃節操豈之代に劣らめや素より
時勢に於ては又仕る途偏すると似れ共頃南朝の威日に衰て忠義
僅に残る士卒之一所に集る忠義の不義の為に偏る天命に逆る朝に及ん
義氣凛乎として終を完うを見る所に而ルヲ独四藩を除て楠子三代と称
するは余何ぞ西藩の不肖と云て欺瞞い哉

○聚楽城築事 石七代 正親町帝天正十三乙酉年八月豊臣秀吉公築く南
北一条分二條に分て東は堀川西は内裏を限る城地なり 正親町帝 行幸之後
聚楽城は前に生害の後に破壊 城地なり 正親町帝 行幸之後
破壊して義昭の南伯の家居となる 今の聚楽門通日蓮通 伏城の外門なり 乃
名地日蓮と号する所以 城門の結搆綺麗天を輝し往来の人眺めあり作立し
事日の若を不忘仍不の号を山号名跡志に載せり

○二條城 永禄十二年巳正月 京都の軍義昭本願寺 時三好一族蜂起して
本願寺に籠り義昭防戦す而ノ織田信長尾州の討登て義昭を助け畿内の諸士
を糾て此城を築き同冬月義昭信長 信長に移り岐阜に
を敗て後信長横死に仍て一旦破壊せり 御所の新造に成て慶長七壬寅
年今の御城を築 寛永元甲子年 移赤松遠を同二年 台德院殿御上洛
後水尾帝 行幸 行幸しなり

○元を将る人義を以て其頑功成難し明智光秀主君を反しなり信長公父子を
弑し秀吉義戦と称し諸将を結び不見に光秀を討陶尾張守隆房 仁 晴賢 其を

大内義隆を弑にも利元就是ハ義を表にして敵臣を討の名あり仍諸士是ニ
属ノ陶逆ニ滅亡皆是を借ッて義の実なし若義の実をいせハ子孫永久の洪福
成へし假ニ義の名ありたに如此手中に秀吉公ハ暴逆狼戻の将なれは世以知る処也
されとも一世の内ニハ天下を得なれ二世ニ至りてハも不及して反覆の速なるをいふ思ふ
足らし又毛利元就ハ良将なり所行ニ於ても秀吉公ニハ比倫を足へけれと或人の言宜なるか
私曰秀吉公の事ハ諸説有色々に注し西山公抔も此公の事を可否を論し給へれ
唯奇妙抔の言ありてとの給ふりの西山公にて評を聞れぬると疑ふる者の批判
無拠事に候へ共云ハ多く論まんも後始ても是とせされハ無益事を挫きへし先ッ庸人の
説をいふ云を秀吉公の大量一瞬の間ニ海内ニ及ホし精ヲ兵是を統しもて異国を
手に延し給ふ給ふたに日頃の不遜ニ遠いく　皇位を崇めふ事大方ならん
世に凡武将を将軍職を望みよふに秀吉公ハ人臣として甚長きなるハ摂関の
職ニ不足と云ふにさもしに是を望まれ武門の権職ニ非る関白の高職ニ居て　天子を
補佐し給ふ是を人に与へし相当なる中古武家執政の代ニ成て征将軍の号を重んされ

凡此号ハ和漢とも武官の鞭職なれとも棟梁の人を崇敬する号ニハ非て是を右大将
於朝て纔く久変ある軍の任をも三代の眉目として被称し風俗後世のならいとて
成しとえしる既ニ近世異国往返の書ありに朝鮮人是を難せし事も有る係る
所以にて秀吉公ハ此号を望給ふまし哉　在人ある家以来天下の政務武家
出ることを再ひ　朝威を輝し武威是に副ふて事臣たるの道を立てられ前にハ
中国を亡しても其他の王者とも成りし飽き神裔を崇しまふ事最も本朝人臣の人変
合しとなふらん太政入道是也　上皇を押込奉り或ハ遷幸を促し彼是悉く朝儀を
いろいろしてハ大なる誤てり又中頃足利鹿苑院義満　本朝開闢より来少て及ひ
中国の封爵をうけて臣と称し事　吾朝の　天子ニの不義是而和平不義乃
恥辱をまされしに秀吉公ハ明より封爵到来しけるを大ニ怒り明使を追返さ
れし事抔ハ後世日本の亀鑑義満の時代の恥を雪めされし也係る国功乃大啖

を以みれハ其餘の暴逆ハ枝葉のこと也可キ歟惜むらくハ此上に仁義をんせられなく
子孫栄久の基ニ哉ト赫変ろへきを暴をも用し事 嘆ク餘りに中華歴世の
中にも此セハ秦の始皇の類ひにして而も始皇に侵されん万世日本の錺ニ具成へし
又釈氏の説をかりて云々佛菩薩假ニ本朝に顕し 神君とならせれ世のふ徳を示し
給ふにや（今に於ても 禁裏 院中の御事其外公家の面々の縁組など 秀吉公黒白職の内に定置し支丈を被用事多しとそ）
○肥前国龍造寺隆信威を近国に震ひ既に筑後肥国の蒲地重並随従せしを隆信
謀をもて重並を招きて三年の後ニ重並の妻室女子を虐殺に於て重並を竜造寺
招き蒲地左馬助ハ伯父なり重並ゝ家免されし此事如何ならんと異見を問たる所云
既に御縁親く妻子も御出生の上ハ隆信の猿心今ハとも和解ならへし今度ニ御會合なしハ
又詳猶の懐る人ししと勧むハ重並如也とて上下三百餘の人数にて龍造寺城ニ隆信
是を味玲饌を催しいろく饗応て重並逗留せしか二日目ニ太鼓ニ似我と云者打ちれ
京都ニ重並の許に来りなを竜造寺之謀りを隆信欺て純を促し似家に太鼓を
承りて二日の後に重並明を告す筑後ニ帰り行一里許ニ来隆信勢士一封
の書を持せて左馬助ニ迄をたる所披き見るに今度重並を招くハ謀りて殺しなさ
暁天に説たる子前途ニ伏て侍し勁士三千後にを進し攻之佃皇攬獄何国とられ
適らん此目見御急ハ兵未相識の好なき又似我ハ天下ニ名人にて其派の此道に於て無双
家なるとにりとて速に似我を連れて可遁事何ノ事違変有るの書面を左馬助ハ
跡ニ引かへし来り重並ニ馳来り此書を捧ぐ重並見て是家運命の縮る
不更ニ驚へからす汝を似我と具ノ速ニ去害を避へしと申し處ろを定したる所云
牛感し急きて忝も骨肉を華ずして君し雖ニ遇ふ後始ニ人を知る事不克ノ勧免
て龍造寺ニ従しめしに仍て独りを苟も此胡為不義を挟こハ豈人倫なんや似我と
こそ助をかんとし似我ニ期を告れハ渠云 似我ニかくて竜遇を家族残き猿楽の身也と
雖人倫に於て争忍さんや君か一日の恩義ニ而度の危を捩こと御遁る氣色なけ
もとて重並此上ハ力なし死ともに伴ひ勢し往と云も敢めす荒後に閑を出ノ歓饒売し

たりしかハ芳泉の之を呼て多分の中へ突入仕る敵を突伏せて孔明に孔を似る
も潔く戦ひて敵と刺違へ死を覚悟し重並ハ雑兵の手に掛らしと一村は荒入自殺
す陽ハ地を諍ハ策を以敵将を討ハ戦国の習ひなれとも是ハ敵の地を奪ハんとて
敵女を以死間を用ひ是を以ハ君父をも教しつ殺し重並ハ珍造を為ハ降
伏に沈や知ハ恵弱ハ偽を助ケ親族の因を以て仇国を并ひ婚を他邦の敵を
防ハ便宜を以人ハ孔世の人心所猜も忘し東国ハ武田信玄陽国振汐北条を謀て
緣坐を成形成を騙し招く教害し剃ち女を捕へ篭妻とし領地を奪ハ且外中
ハ浮田の暴逆畿内三好松永ら戦逆且外ハ可勝計 ○駿臺雑話曰應仁文明
の頃京都ハ細川畠山家を分ち謙倉ハ是利上杉雄を争い日夜合戦して虚き
月ハ去ハ来ハ君臣相害し親族ハ教しを毒鬼域のハ其墓虎狼のハ
天下人倫の尽絶果ハ唯日月の光ハ陰ハ是を古今孔世の極と云
し生涯全ハ稀し右雑話の説も尤ハ

○奇策を三ハ其元亮の土岐に住し小土地所ハ荒れの子亭ハ居ハ家狭ハ
槍を走ハ故ハ門外ハ行を立ハ其前を持ハ槍を手内ハ納ハ互ハ防
土波放国の時奮ハ行ハ居性ハ向ハ三実ハ土波威ハ後ハ三
を奉用ハ試ハ才智勇兵備ハ将器あて隆ハ而ハ竟ハ国の孤城ハ成
爰ハ於て逆ハ主の土波を追ハて其ハ国を押領て道三家ハ稲葉伊賀
ハ姉を嫁ハ艶容比ハ類ハ強ハ長ハ立ハ計嫡ハ戈竜ハ優ハ
ハ長ハ孔其長六尺寸ハ容儀ハ立ハ而の孫のハ一尺ハ寸乃扇を立ハ
ハ一来ハ聲力人ハ紹勇倫を絶ハ常ハ意愚ハ如ハ山ハ而ハ顔恰明
朗也密ハ時勢を計ハ克ハ無之道三也ハ妾の腹ハ二子を長年次孫ハ命ハ云

道三義竜を愚しとして其を廃し毒を次を立んとす義龍は
内城を居道三は外城を主義竜日頃其心懐を諸士を嫌う卒を接て大に
其心を得る所伊勢伊賀伊予伊豆伊達伊藤提伊予稲葉伊予氏家卜仙斎義龍を
服を甚機を計り中にも外戚なれと先稲葉に密談し偽て病と称し
加持祈禱医療を尽し不方大切也と披露を毒を次孫四郎に兼て義龍と
不和なれを不向訓え稲葉二人を嫌て其兄危疾を所を訪ふ人道を
遠ふ其上兄死去あり其嗣子を一人しを時諸士信無き故誠にて服を
を士卒不服し国を京伊なれし所を柱て病状を訪ひ誠に
諫れと二男を海の理を命を諸て嘱を稲葉曰諫を義龍
小若く幼日根型と云仕士を仕を云付世を傾し方動力と云大切物と日根型に
按く二男の何心なく入事数を一刀を教く桐図の子孫を接て同志の者を
道三は牙城に主て此時を牙城を必定義竜を反を為んと大を念を偽る兵を
あり諸士は道三を虎賀根型を殺んを義竜を家智達方を懐き大勢に
説方、近集既を為到一万余及を乃三を属を者は僅に計を義龍
も流石親を命を攻を共を三は兵少き故義龍を対明合て居を
道三牙城は危を一里を傍を地利を元を一邑を引を出て
陣を張を義龍は侍を命て父を三郎を害を心を為を父を対
を攻戦を好て唯和順を庶幾を為を道三等愛更を解を
義竜を可討を定られを仍義龍を不及兵非城外を出を兵を備て待を
弐千余の兵を一陣二陣を切出を金義龍の中備後傷左右旗本少列を乱
奇出怒て静を進むを道三遠を跳義竜は未軍張を不練は先を級を
是を孔を思を渠の軍を老功の者を及を敗し敗れは為は爰を討死を此去
此軍を為を永死後も隣国を義龍を托を者を為は永く南京の物を
是死も永懐を法を将軍有を義竜を不器人を子を立んとせは我

不仁と大義なり所詮義経この日を討て始敗せし一陣二陣も寄返せて
主と一の無勢潰れて自害を未無数を交えし時義経幸に向い汝等父
道三を殺し主君を諸士帰参を後時永井忠右衛門と云剛士矢名を抜て
云う進み出て参らい主三郎を敵対仕う所忠右衛門生捕申さんと云者と無比父子七人和睦を立て道三公出陣を君に箭衾を
結せ給を福野して福野と申す義竜欲を取軍始て主三郎を打ち
抜之云新参の者仕て主更に害しを義経の陣に使い来和睦を社
を出みられと云せも異人乃三郎を突落て抜之い潜て既を捕処
小牧源太と云者後号主来主三郎を切落し抜之を押のけ乃三郎首を
抜之を取主を鼻を截て帰義経為出く志を乃小牧源太道三の
首を捧て義竜も怒て今いを同抜之流し爾の前を伸て言て印の為
鼻を截て捨て義経帰陣を義経主を連も其家遍れ勝ち
墳墓は仍て軍を義経向く尾張の国の道中を過て信長出向て
平切を待ち遅の物を勇を多を信長少清く既を進軍を出れしう
出の思られん師を以て飯田寺れ彼の義経を家一代活州徒清
嗣子龍興代を小牧源太を主を抜を詰い小牧の城迫炭を立て所を
聖本寺を斬て主を斬小牧城を抜て上ケ寺を抜を刺て人立所を死を竜
興生質晴頭を小牧源太所の力を仍歌の為を形れ仕て物に為所不為て
死て後い戦毎に利を少い絶を信長の信長滅を

○育成龍興の居行中主家は一万石を領し西美濃善光寺を建る沈雪温敦して人
を分為を知竜興三老臣安房氏家不破ホ行中を伝て不利也行中三老臣を教え
事を謀る中傅の間に主信を始行中義信を勧て愛を於て雪士黄人を結て
備支の代を句三老臣の登城を待て便を時を到て兵国を堅め記して三老臣を

教害を竹中に流布の為に竹中ハ益々反心を企て唯三度の矯奏を悪て
君を代るゝ罪を誅しいとこ君ハ皆く此球を切て流し支流て後近く新たに
中もれて竜興も家力増を出る助て竹中遂に城を拠めて齋藤の士卒多く
飯倉ハ数年流れて新興を呼返されて桐壁長門様並に者ども新興ハ
方なる無如し時信長ハ竹中の方へ使を以て竜興を教さハ男居を竹中へ與る事
なれ共竹中ハ不皆多新興を背くに船を出家居の罪を斬り如也と敢て返
答も不及竹中ハ在世の内ハ信長国境を侵ること不克竹中三十六歳にて病死て生
涯多つゝの軍功一度も無し絶世の文を嗜む武を嗜む其人を知れる
人々に服し多く国を治めて
○時代ハ委不知駿州ワランナと云者ハ生質方寸陰略を以て日本
の内にて比類なき豪傑なり仁義を唱て国王又ハ国王の男叛逆の位を
奪んと兵を挙して是危殆に及ぶを仁義を克して乱を鎮め治堂を
討平り其功ハ仍長長と成名をカツラと改め精強を伐て勇名を
此時謀を以呂宋船を奈取多餘多也呂宋船ハカンハントと云多四五寸計の角本を
拵て紙を船と一面ハ麦波し敵を船ハ奈移んとする時カンハントを引くと下り掛
一度を以を船を組合ハ紙を投間ハ方を突也し防く故ハ攻戦墓く麦叩多
仁義計多尻を駿麦用をして多くの人を持て攻戦ハ及時を手あの如く
蒔を以れし敵の眼ハ入る働得を以て敵を斧戦を以也を伐彼敵船を奈
為て大利を得て船を奪ハ影く行ハ一度飯郷の国者れ元遠の波濤費用
を以ふ多く多を用く屋を泊裏也を頂ハ日本人選て渡海の者多し
中国の者ども懐麦として呼多対面を其仕方ハ衛を多く剣を持て選て
の官服を多く粧ハ恭麦者也と修く病死多飯国の志遠ときゝ
○尼子右衛門尉晴久ハ宇多源氏佐々木秀義ハ出家尼子仲多経久嫡子也経久ハ
中国七州を領を晴久多て国滅く五を領し雲州富田月山居城を永禄

五壬戌年七月毛利右馬允元就雲州ヨリ御引入鳴根三郎を伐て爰ヨリ在陣し多
合戦成て及戦い牛角山にて尼子氏七ヶ度籠城て終に元就策を以て永禄土氏辰
年正月大利を得て晴久死嫡子三郎四郎義久二男九郎四郎三男百合子兄弟三人
降参元就助て藝州下三郡と云所を義久に法体ノ瑞雨斎と号爰に
尼子の臣山中鹿之助幸盛月山落城の後丹波ヨリ伯耆ヨリ出て
光秀方に逃客と成て居り杉山原正久秀和州信貴城に籠信長に敵する時
鹿之助も信貴に借て一二を争ふ城を奪て丹後越て又因幡鳥取の
城を乗て山名祥丸家臣武田高信為に追られ寄辺の俗て居れし鹿之助
勧て因幡に下り山名の旧臣を催し武田を亡し祥丸を飯塚城に迎て
江州安土に系信長に渇し丹波ヨリ攻て京都に幸し今ハ
嫡子輝元代なれい元就ハ弓矢を捨剃髪し純時長故下し詫る而信長を後
[illegible]尼子式部少輔久幸と尼子泉州堺ヨリ出て長子と取立尼子
孫四郎勝久と名乗也天正六戊寅年四月播州ヨリ攻上り毛利ヲ攻て
終に播利を失ひ勝久自害此時播久ハ譜の士卒を教え事無之に終て鹿之助
を辛ひく毛利に降し時を待て又志を立ると云鹿之助因幡を去て不能
終を播久ハ生て鹿之助ハ毛利ヨリ屋敷を其頃毛利家ヨリ名を長筑前ヨリ
と云者鹿之助の接待ヨリ出ル長ヶ俗く不事也鹿之助筑前ヨリ
向て来ル事ハ去る写と思ふ人ハ遠ものハ今対面して筑前殿も亡れ
ぬ男振ハと云ハ是ヶ云 誠ヶ鹿之の言葉如く人を出をく少ヶ近く見ハ遠ク
ものハ鹿之助も去る所ハ日本一の強ク勇士と成て投ひ[illegible]に自害を勧め
て身ハ敵方ハ降参ハ[illegible]に業の外ハ[illegible]鹿之助云ハ[illegible]
を[illegible]と流し[illegible]を習ふ山中の流前ヨリ中に[illegible]ハ更ハ是を思に
に飛を是ハ毛利の雪辱故人品を雖ヶ任ヶ勇を奉ル心て[illegible]故
[illegible]を是を思ふ[illegible]鹿之助の[illegible]を[illegible]時[illegible]

所の山中的四郎脇差を奪ひ取れ海を流れ人の内男女[illegible]毛利家
に仕て藝州に[illegible]備中国松の浦と云所[illegible]毛利家の主河谷[illegible]討
[illegible]を不知時は[illegible]所[illegible]也天文十[illegible]年八月十五日山[illegible]国富田庄に[illegible]
十三歳にて初陣十六歳にて菊池[illegible]と云大剛士の首を[illegible]生捕の武功数挙[illegible]
小不逞惜[illegible]義名全[illegible]事を又[illegible]流[illegible]元良も一代の中首数三百
取[illegible]大功也 此首数[illegible]可[illegible]考

因曰山中鹿介尾[illegible]仕て乃者先秀吉[illegible]信長公[illegible]見[illegible]山[illegible]
家士[illegible]口丹波山中[illegible]旅[illegible][illegible]云陪臣の身[illegible]悍[illegible]衰[illegible]
[illegible]と[illegible]山中[illegible]乃者[illegible]日[illegible]中[illegible]として山中方へ
使を遣[illegible][illegible]方[illegible]先[illegible]方[illegible]不来仍先秀[illegible]雇一[illegible]組一尾[illegible]山中を
[illegible]野[illegible]山中[illegible]謂[illegible]云小[illegible]時の[illegible]
[illegible]三度[illegible]首を[illegible]場に於て[illegible]首尾を
[illegible]有切の[illegible]物場[illegible]始末[illegible]詳[illegible]後日人[illegible]
[illegible]不審[illegible]山中感[illegible]偽[illegible]人[illegible]言[illegible][illegible]虚名を
[illegible]の[illegible]編[illegible]事[illegible]の志[illegible]未[illegible]首[illegible]養
[illegible]事[illegible]也始の[illegible]を[illegible]首を切[illegible]四五度の内[illegible]
七八度[illegible]及[illegible][illegible]夜の[illegible]撮[illegible]十度[illegible]
[illegible]見[illegible]児[illegible]杖[illegible]戯[illegible]仕[illegible]
[illegible]如の[illegible]と語[illegible]
私曰勇[illegible]時[illegible]也首数[illegible]
[illegible]に仕る富[illegible]の高[illegible]

○相馬大膳亮利胤家中ニ金沢備中と云士を相馬代々の忠臣ニて既ニ備中ニ於
十一代と人の馬前ニ討死をとゝ子忠ゝ相ハ利胤の子大膳亮義胤病死の時ニ殉十一
代と備中ニ討死を遂ゝ孫の備中ゝ義ゝて黄泉の供
仕ん〻と城下中村と下ゝて殉死を望ゝ奉世の土地と人称嘆ゝ
可ゝ西私曰右或伝ニ載ゝ十二代の星霜幾ゝ同家ニ十二代ゝ仕ゝる
ゝて稀ゝ多ゝ際ニ名討死を遂ゝ望ゝ本曾宵地ゝ多ゝ切名の比
海ニ流れゝを恨む情思ゝ親子兄弟叔姪の類一戦場ニ命を並ヘ同時ニ
死ゝを代々の数ニ揚ゝ知ゝ人ゝ代々の歴数ゝ代ゝの戦国ゝ行
代ゝ戦の多ゝ此ゝ事の実否遂ゝ便ゝ可ゝ松平と反比の
同ゝ家ニ仕ゝ四代ゝ忠ゝの討死を向陽子春高の和漢ゝ例を不尚と

云嘆し況此備中に於てをや

○太田持資入道道灌は太田道灌の嫡男にして扇の谷上杉定政の長臣也

後花園院永享五癸丑年に生る文明元丁丑年四月二十日武蔵江戸城を築き居る時より

上杉家と不和なり山内上杉顕定と扇の谷の定政と上杉と年来不和にて

合戦止時なし或時山内の方の長尾景春入て伊豆計を以扇の谷、憲房を

逐て三浦に走る景春曰太田道灌は前の長尾伊豆の所領を奪ひ不如此去人を

誅して家を合体せば伊豆代早雲を亡ぼすべし而て関八州

を手に入べしと申遣しければ定政信じ景春を召て在て治

め為の旅行して道灌を誅を父を真に殺せ

と云て両度しかも道灌を討れしを苦しみ遂に江戸城を捨て途中

怒て和融忽破れ再水火の如くなりぬ

因に記後臺雑話曰上略上杉氏の時太田道灌と名将の誉あり絶れた

扇男にして上杉氏山内扇谷を宗家とし此時城坂の

上杉房顕山内の家を作り長子顕定に及て道灌を父に真扇谷の上杉

定正の家老たれば定正と為て顕定と嫡庶の義を薄し親族の好を為して

扇谷の家を興し甲州を攻き及て謀を以て山内の地を奪

しかば上杉不和の故なり然る長尾景春の為に敗られ

忠臣材を底し身を保ち定に似て去ると武略を兼るに

付て文学に志し和歌を好て詠る孔世に得る人にして箱根に居

感吟せし世に傳る叔父のトある歌に侍り此方を世に迷

数寄の時詠ずるよしにて有たりあれ幕府集に載る書にて藻

注なるを中に此方をのせて其細書に康正元年の夜戦の役に紀も此方も

入まゐらするをかさねていさゝかひるまずしてかゝれども味方の武威につよくして敵
北条憲定のごときはつゐに自腹して鎧武者のつよもかしらをあるいは例にあつ
まりたれば死したれども倍々時勢の町人の格禁の記れなくて見し男あれば味方は
中村源助備前守東京寺にて京家の人出世しつゝて風流に技術せられて候
をしまる此世に敵の男は紫毛なる兜を赤く二筋引両に丹き竜の紋付たるさしもの
世なり遠目なれども縦の毛高いつ光しても見へけるに中村まつて錦ふくめて鎗を合せしに
目の前に敵の男清きすかれ見たりて中村すゝみて首を取て家来に来らせ
かりくてちん語せんとしていまだ特定まる男の色白かりし年若き身がはれへき
みだしたり紫のあたりをさかんに姓名を知りて哀もいやまし仇なりしふくらかぬ候ぬ
中村云ふ此の人々の詫変に歎きとかくのしかも手向まとなめ候へはまさそれ
向てかくて紀されて旅のとしつつめ兼ておもひしと思ひけるそいふ云ひ取返し
あの児もしも法されども能も明治ひかさしも申てもかしむ計そ之誰の言ひ出れ子の仕るる
兼子不忘義心古ある勇士の志表あらは真志

胡夕は義を立んとせしに生首を斬られしも義を忘れず必しも戦場に死を
軽んずるに限べからず家綱の代士の道をば死分をしらずと云々孝志戦場に然
軽んずるに切り首をとられても後を見せずしてあかりも胡夕は義を立んとはかる
に飛をて続けし様まで志も思い前と知らしまれど天貪残は常々表生此
事故に名あれば敵も味方も死しても生るゝ者もとかくいはれ候を従来すと云し
○稲葉一鉄信長公に従ふと雖心服の体に非ざれば後患有べきを思慮有て一日一鉄を
亭し殺害せしむるに於て誅せらるべき僅なる所にて一鉄をあらはして殺害に入時お供の三人
むかし桂掛し且つ掛物の画歌を一鉄に読しむ一鉄かしこく文学をしりけるを読で三士
其意を問一鉄解て信長に語りて是を聞き則自殺害に入事は止めし唯勇烈のこと
此事を思ひしに文学をも嗜あり今凡世に奇特のことゝ今日此事実は倉卒に飛を
計ふて殺されんと為也きしかるに今はや色々の文学に愛て（メデ）赦え永く家老に勤居となれと

ゐられて一徹も敢諾せず時三士懐剣を解しむ一徹左右を撫ゝ謂て曰汝と今日の交必定如此なれと察するの故に早晩の場に臨て相ひ取て死んと為の侍

ゝて懐中の短刀を抜出し信長の前に差出す信長最も雷霆を怒り

○上野国に重長（其姓可追考）と云武士あり六万石を領し上杉憲政と親しく敵対に隆る憲政を押籠て国を奪ひ憲政を逐て雲林院と号て憲政を雲林院と云ふ故と怒る重長も行方知れず

と知る親知の人物と恨悔も重長の居所不明なれ此時三十家計数の士共も随従し密に人に云ふ信一謀の如き所以君敗国の者

陪臣自教住し別首を持て其戸を祈て君に其延の中入陪臣を撫ゝ門陪を欺き君を相氣者ゝ侍信長を討ん為戸籍を偽り

埋ゝ出ん歩んも容易門を近寄ん事難し

と重長問て制止て其夜月忌に一封の書を出し自教に其書に云勇士

諸を遣分外を制止て夜の為に制止ゝ者の為に後に恨ゝ者を出し自教に其書に云勇士

遂に死ゝ書を重長源氏に公儀の忠士の志を

左衛門尉 姓名不知 と云人門陪を欺き出ん

門陪を偽ゝ者不諾ゝ云常に月忌の高義を敬ゝ容易に出し

郷ゝ出家遂に一槍突ゝ試ん郷ゝ出ん中左衛氣色成

損して月忌死ゝ重長源氏を怒ゝ密に探ゝ出ん

出ん侍ゝ法外也と怒れも左近衛に不許之して左衛門尉に空爰引返て左近

出て左衛門尉に対面し今日の事は君の交也空を歩事を不厚互の恨更に方無

ゝ其の番も分取切ゝ四郎左衛門と川窓ゝ交代ゝ後の縁を用ひ事

蔑せ云左衛門も不敢課ゝ行ゝ月忌死骸を門内に埋ゝ怪を加

形外、婚ゝの事ゝ必云ゝ方志の通ゝ怪入ゝ云歌ゝ左道を通ゝ聖彩

右の通を以辛長国に帰事を得ゝ

○周防國大内家ハ百濟國琳聖太子の末裔也　推古天皇十九年辛未百濟國琳聖
三の弟三子琳聖太子防州佐波郡多々良浜に来て支分代々防州山口に住せ代々
九州の官領を補し義隆に到て防長を兼領し石見の大守也しかの天文十年
辛亥九月二日家臣陶尾張守隆房多々良浜深川大寧寺に於て生年四十二歳
まて自害せれ大内家滅亡　惟古帝十九年秋九月平年二
及ぶ
因曰義隆幼年の時父子共に云　或時に幾の子ども遊戯をなすに遊戯をなすを其傳教伯者見て
隆房の事なるを彼後を共合の筆をもて不審に於て見也
帝ことに大内家陶尾張守晴賢ハ三万騎を領し其威並ぶ者なく
権柄を肆に又老中相右遠江守武任方紙智勇秀れて義隆卿を晴賢
猜忌して後を争ハ隆を陶尾の家を相続を企不忠に
捕縛て陶ら逆意を義隆に訴へ新に義隆を命心に出陣大方陶に属て
義隆ハ服従ハ隆を謀人と称る故に義隆長門に編を竟て大寧寺にて
自殺ける奥に義隆の侍臣筑井常陸正威と云者三人の者ハ仍て公方
義輝公に奉仕しる三人の妻を学て公方ハ服をもい夜を昼に続く山を
駆りて城の趾の廃るを見悲歌して先己り領地に潜居を毛利元就密
謀して志を通し能ト表ハ元就に服せて陶に従て実ハ元就に内通し
筭を晴賢を表ハ呼打出し毛利方大利を以て晴賢を討て人大内の
仇を報しまつる
○三好修理亮長慶四国を領し畿内を従て天下に志を其子豊前守之康入道
実休を河内の義長に長慶も永禄元年戊申三月吉日畠山尾張守及根来法師
等と和泉の久米田に勢を寄て実休討死を長慶ハ十日飯盛の城に速分を
無行し其年長慶に到て摂津国芦の一郡と云角に人を附を於て長慶も

首を渡し工業ともなりて実体討死の告を封書を披
見せしより先きらけなき体なり吉弘の残党より那も人しぬくしと付る傍坐どもみ
をかして此乃戦感を賞めて長慶言ふハ実体歎の為に封ともの今日の連為
光かく終りて以て関に学を納めて秋帰時に兵を催し息子宗全戦を遂長慶
し危き総攻しゝ終に大勝を得たり

○筑前の立花道雪嗣子なし其後の戸次紹運か末子を貰りて子とし道雪卒
後家を相續せしを立花飛騨守宗茂左近将監トモと云丁度薩兵諸方四万許
にて立花の城を攻此時戸次紹運筑前名将城にありて猶更激勢なれハ家臣共
速に此城をあけて宝満か嶽にうつり敵立花の城を囲ハ後詰をなさんとすゝむを紹
運不諾シ云敵ハ多勢と人数一万を分て宝満か嶽を囲ハ敵兵宝満を下
りて克りて是敵を懼るの残党味方を救ふの理なし又此城持こゆ
急きん紹運て肉体をかけて死兵となりて戦はん外の機なへしとて薩兵ハ
ぬきん也と云共五万兄戦せんさんとて見苦敷軍をせんや力を尽さハ討死して
家臣の勇を敵に知らしめ仕五百や千の援兵なりとも本城の後ちとなさん家臣ハ墓ハ此城と
士卒此内に於て立花は名残有べからず立場なれと未知されハ各大将の為に励されて偏に
討死を期して三百余人の首を奮発の機を取りて敵薩兵押寄に及紹運三百余人を
こ死に僅て大軍の中を突破り爰に血戦を試されハ薩兵の死傷算を不知紹運ハ
思ふ程戦ひて力も尽て今ハ是迄也と思ひきりて士卒諸共一人も不残乱軍の中に
気を挑て吏ら薩兵本城立花を囲れ共城素より堅固なる上紹運の宗茂士卒
を指揮して防之ハ薩兵も猶囲を解て帥を返へし紹運に奮戦の功敵に及へからぬ
云へし

○和州筒井順慶家人に松倉権助と云者故有り牢浪の身となり浪中にて緩病者の名を
取ても出家を立て蒲て氏郷の家に来て緩病者として良将の下の用に立へきを
知らハ扶持を家に取と郡々氏郷思ふ子細ありとて早速呼寄れ夕に合戦ありし仲の

仁倉餘を食を貪る氏にそなる是を以て源二郎を共に物ひとせるを又を後
の軍に衆を押へ働き源〳〵の討死をなれも士卒の雪恥を雪のこれあれ
る時の用に備へ兵〳〵し又一法を拵へ拵へ家を家に〳〵汚名を取しを嘗て
絶て永後病を名案良策の評を受て〳〵強て甚法名を雪ぎんを励まし
氏卿又を伏機を抱へられるとそ〳〵し拵へ討死を受て氏卿命し〳〵集別果
〳〵大志を恥を知るの也仍て取立しを今思へも是を後早を今を遅く
元亨二年の春を平定成討死を内紀を永を〳〵〳〵を悔されを
同記筥井等詩に木阿弥を云伽藍を或は聲者あを順業死を御其頃鎌倉乃
事なれ近国を色々を窺ん事を恐れ出仕の者を順慶と容顔を齢相
似を皆の用に出仕を以業して近臣の者を防め強れを始終相違かれ
る為後に元の生涯を成るを今も世の節を云へ〳〵此業新なり
○北条氏綱豆州を攻時戒里の赤勇を二人を人病外に者を主敵を図を此を疫病
源氏〳〵皆〳〵此を通に此を通に為訂公乱を避て立退に〳〵敵の為に死を伝病
郷に死を死仕て郷道筋に此を中氏綱を惜て多を侵た茅を共に食を施し
れ氏大を恨を毛を衆人氏綱を懐て伊豆国忽に入を幾程冥人を後られしを
○下伝国古河を源三位北政の孫を今古河の城内あるを北政典病を古紀
地語に北政平等院を自害の時渡を雲の十七唱を呼く永白骨を拾て諸仏を
供仏を無し吾此を思へ〳〵奇特を十七命の如く〳〵古河を未白骨を
下し供て揚を揚に拵此を此を此を〳〵と切北を埋を永傍に菴石を
中を証数接木を今を在を云
按に此説不審北政未朝に十七唱を歳ノ冥東乃源氏を後〳〵を〳〵其後十七を
塚を築を住を〳〵又後を年記を北政死を後を後を下に〳〵を歳を下に〳〵
往て唱を伝に〳〵を後の苦を〳〵彼を骨を拾を諸国を〳〵を三を後を月
下に古河を〳〵埋を云〳〵

○武田信玄信州発向の時始め羽尾樹之丞を衆見之て恨の色を仕玄之敵を向
応答て其之様を又聞始樹上之丞の時其軍大利を不得之ゆへ吉例ゝ
なを名勇士信玄少も敵を之侮鳥流を取て自ら之を侮を出て流の或を
解ら是ハ此度の陣の時始り不来ハ応を勇れ事成思を せられしを
○上杉謙信二の丞と云者をして越後越中の境を塞を今の処越中の神保謀叛
二の丞も是不図態を謙信ゝ不知越中ハ働の時神保二の丞得と人を
一陣二陣を取りて延引三千謙信の旗本ハ実荒る不之の事もれ旗本の士卒
同之ゆゆ処を謙信少も驚不配を揚く猛威を振ひ士卒を励し神保二宮を
を痛く南く之二丞三不拉れ之一陣ハ遊軍と成二陣を後備と求神保
二丞散と敗して寨と入処を附入りて帰時ハ攻落れ孫子に常山の蛇中を
擊ハ首尾共ゆと云りの敗亡一或人曰君ハ向て弓を引軍大方ハ怪ゝ士卒
ゆゆの後時ハ迫りて拠ゝ之敵を慮ゝ之ハ也ハ義ハ寡人の本質し仍而皆
時分の非義を愧の心を生ゆ敗形也 我ゝ生ゆ 仍ゆに寛と云ハ又ハ弱ゝ
を間ハ渠の兵懇ゝ一物の心未止ゆ間ハ強く奮れも思ハの外ゆ強ゆ物ゆ庸
將乃上に如此始ゝ名ハを不謙信の勇悍奮迅ハ諸人の恐怖ゆ如ハ神保二丞ハ
兵ハ之を知ゆ也ハ心慮也上杉の兵ハ精流ゆ之を歌の敗速を要ハの怒氣を加故ハ
小強く仍虚ハ小虚ゆして実ハ是実ゆ顔味方の機を謙信を知ゆ之強兵を急ハ
撃て何の疑ハ利を得ゆ之 強と一偏の事ハ 明智光秀の信長を殺逆せを
秀吉一朝ハ亡ゆれを希世の沙汰ハ中世 是ハ秀吉に限ゆを 誰ゆも賞を唱ゆ急を
撃ハ必可勝の軍也と 明智ゆ氏ゆ ゆ 婚日に人ハ裕ゆ ゆ ゆ 右に仕或人の流と同元
○松永弾正ゆ例久秀ハ三好長慶ハ仕ゆ ゆ 右筆ゆ仕上ゆ ゆ 長慶ゆ成ゆ信長久
秀と善ゆ或時信長久秀ハ対ゆ ゆ 是ハ智勇の者恨ゆ一乃疵ゆ久秀
其所以を問信長不云 久秀ゆ之問ハ ゆ 之人不ゆ云 ゆ 潜ゆ不呼ゆ者ハ
人身ハ知ゆ之ゆ時ハ也 是ゆ久秀異心を生ゆ 三好家を 滅ゆ

○強信の士班村平次と云者浪人にして諸国をめぐり始て清正の家臣庄林隼人の所に
来り清正に武功を問ふに答へて曰く隼人云南部に仕へ居りし頃や平次云南部の郡名
隼人云孫の望い奈何平次云僅の俸米にて暮す隼人云県い上杉家にて五千
石の身上と少い今の系孫に向ひ其時平次云鎌倉家に
功勇を稼て来る孫を南部に来て未だの功業を旧孫にて分る事
強信家抔い曾て少きるを先無尾にて戸沢家戦場の首尾を合せ
一度の論を五百石宛に定れて被下し是に懸る場に船流に多に船を追掛て
無勇勿論も数に入る事なれども面白き事也と其所に仕へる朝鮮の陣中に衆に
抽んでて第七度にして三千五百石に取上り平次なる人に嘲きい武士の働に
を確い此功に賞を取り立身し家を子孫に遺さんとの心なるべい指る働を
成さるべし戦場に臨み変を死地と定て身を不顧ときい自然に功を得るべしなる
此の思慮有る人なるを知る事なり
○加藤清正の軍勢吉村又市郎山浦甚兵衛朝鮮人に弱い日既に平壌及清正人数
を多く川場に入れし誰を可逃と其意を見色に左林隼人の遠振に生を
呼て是を中分に隼人に来て命を取て毎陣の間に赤入雖多く衆を川場に
此時数の俗変清正の傍に在る涙を流し怒る色を清正怪て如何を問衆
云君に左を見る事庄林に走る人を武士の配に庄林と云て君に従て白及
を振る庄林に勇を君の眼前の事に拙に君の傍に生を生れ遠振に左生
庄林を取る者せる事に成る須も行て侵勇を分られ事に愚昧多を
不忘に成る知て中れい清正知て左い此を泄を泄を多く多の股抜耳目也
られた其用る知に器を他に今泄を逆に必敵に強全く力戦を生を
勇敵の事を世に成に庄林に今見に敵に軍実に川場に陣を抜に若に強
敵堅陣の勇を不用に叶難を泄に泄に為に人に文に人に及に生泄に長に処世に
宥られ生に歳年に服を生清正の表に騒に船清正に土を用る乃一代の

心法教益し

○清正母衣ヲ着する人を撰定めんとて諸士に命じ〻入れをさせる則信を廣間に出し
並居る者共の札を入るゝ坂川左衛門自姓名を記し入れ置り清正夫と札を撰見し
坂川が自分の名に入るを所以と云ふ坂川云ふ俗人の心知るべし既に父に眼前多
二三度捨も仕る時の手柄に弱測に成生ずるの父子が親きに引て父子互の
心底に為ては幼や他人の可否に於ては誰を指〻入れ可仕や信考に世事に安堵
幼〻母衣を与れども名を辱るの事に成り所詮自分を中立て言られ
清正涙ながら孫事に成し別一信の城を持て六百石に多母衣を許

○北條氏政の時分六十有餘の遍系俗相州小田原城を通り制札を見て嘆息し北條
氏も世に成り亡瑞氏滅ぶと云ふ者共も所詮に成り所奉行信信を
振り爾の上を命じ由緒の制札の面に非理の事なり所以を包む彼中も同
信の云制札は非理の事に見え信云而て考慮の斯く中セし所以に永三十年以前此地を
云時に制札の箇条五ヶ条信云云信云云今日見る三十ヶ条に及ぶ国君威
士民服する時に法令固少ふして能く国君威裏に士民心服時に法度の七条
小事を政令既細成故に士民弥服し国君を恐し畏る如此士民の心離る時に
其罪ある人誰と共に国を治めんや亡瑞氏滅ぶと中セし也人の非を正さんも
自省し自戒ずに昔の世威は還ぶ〻〻町を治威ノ異を書及び廣の
捉の一助に成り云〻

○皇百一代正親町院の御宇王威男は裏武権用く〻失せ諸侯各国に〻
蜂に逆威を逞しく陸国と并欲せん支を欲する外作の引諸侯に対し大盗を
〻〻城〻況の盗人時を以て家〻〻陸盗切取を専とし我中国尾張の間
強き〻し〻〻剛毅を〻〻〻剛毅を含るのにあ〻〻〻〻副業を試る凡信
〻れ〻士に者も〻〻堂を作人多時分〻〻を業〻〻〻れ流石に性善の本然を
欲し〻〻〻有り或る屋内を立城を〻〻一焜の粥を煮る其粥の熟し〻〻

試に是を食んと欲し箸を粥に入れ釜の蓋に置て指を以是を押しいれて此を
うとゝ云ふ又黄金之盗賊物の落り家見て人も無き所ゆく食糧の乏しき故
感し永徳盗の業を是に志てゝ愧て甚豪を侵さんと志し夜又丁度盗の
窺ふを竊て内の体を少し媼女の多して今宵雨荒く風烈し盗賊や有らん此
いさゝしき為に年ふれ論の鞭を加へし弓に張弁よ此論を能通るとて物を投
去を遠方見れい縮を張る男を庫中をうかゝ多媼女と婢女と二人の外家なし
人を盗ふを勇気を愛きるとも不侵之しるを美を云ん

○黒田官兵孝高（後号如水）へ秀吉公豊前を賜此時分伐取と号し四国中に不服歌
肯れて降を乞ん切従を以を詐支を豊前を捨し給に是を以紀伊の
谷に峡岨の地に住して地の巨豪紀伊と云りの孝高と屈強く孝高紀伊に入を度と
脇敗を其後和平故く縁を結ふ紀伊敢く出ず三度を往く今別度紀
伊孝高の撤を為る窠之吉田宗帰を支配を（後号但馬）に青の使に宗
此人に度し此功有る勇士なれい紀伊盗を取ん時を斬を撤紀伊
為く一旗平て盗出る者る紀伊を勧之紀伊婦を孝高盗を揚紀伊を紀伊
頭を下て刀を指ゝ居ゝに而ゝ戦ゝを嫌い天下れを吉田の撤を為る伴を
孝高敬ふを掛を着を云 胴の下分義に次の間ゝ刀を抜き出く斬ゝ
折損ゝ紀伊ゝ刀を抜合を孝高向へ飛入の紀伊の首を打を
一刀に折倒を土間と成い少ゝ功を為る切者の一旗り之紀伊の勇に張れて切損し
ぬを孝高を佩を伴を是を当元日比の切者れい孝高歩人を捨を紀伊を従去
支を南ゝ討為を

○長岡兵部大輔藤孝の家来下津権内と外い牧度の養れを刎の者也元亀四癸酉年
七月廿八日信長惣攻浅の城を攻取に成将岩成を従外に大力の豪雄岩成付て
出る勝を下津見を考ゝ戦い搦の上ゝ組と等ゝ搦の上に落ふ下津に河
の素生ゝ究竟の水練岩成に水を得ふ為れ水中ゝ岩成を突放て甚を

清き一刀指て突放し三刀指事首級を池田に渡て義孝之を持て急き信長へ
献ずて其首を江州に送り持ち来れ是類倫也と感賞に
云ふ敵し猪頭を決して生下ふ死し若刀槍の不叶場合噛付んと云ふ此時
下部ども右の小指を根ぬき噛切めとて乃体を青呉枝の指物也下ふ枝を頭
名乗ると云ふ

○小松の原と丹羽長重の軍将佐三郎左衛門後者にもと云者を度々酒を飲せ
生質豪健者人也と爾江州彦根黄昏時合戦の前今度の
前田利長大坂を山口玄蕃允の籠り大聖寺の城を攻落して引取と云ふ時
丹羽長重三郎の跡を付墓の内口まで追て首を取れた山口は二十有餘の老武者
なれて流石一力疲れ息休まる時帰休まる誰も石垣十四人を来て其
首を奪ひ去る山口大怒り後方なく忙然として出る書班白の髪を頭上に結
あげ自殺せん麻衣を着し腰に短刀を指て片手に酒瓢を提て江口の陣中の方
へ行と云ふ見物の敵中を通る女の身なれども者共も指て
定て面白の酒飲んとの事人云ふ一盃酌て呑とるべし又首級
取んと心を付て書とさし指出は美女と呼れ見物も老幼男女共に
生命傷事なを知ずに彼の婦云ふ敵は山上を往来まで
所なし首一つ計とりて是度して居る者に飲ずに酒は無用
無限の働きを捨て浅井山に上り酒迎を求て
指て云ふは江口は敵に取て面白敵と云ふ討士を人一瓢の酒を呑ん
書を取て先れ居る者共敵中に駆入首一つ取て是に指て浅井山に登
清事堪忍いかんと云ふ書を知ず其首を和と名乗る名に付て此酒を取れ也
呑る瓢を傾き又呑れた出は山あの古婆行方知れず置わ清
し悔む江口も面白も大なる是を無せしかり

翁草巻之廿九

○小條氏康隠居し子息氏政に国事を任じ或時氏康氏政に謂て云其業を
絶の後何を以て条々を氏政云史記を撰て条々を答る氏康云最
善し是を将の常と為べし殊に今戦国の日比は士民を愛恵せざるべ他邦に
勝て叶と良将に属す也故に士民の事いかの如くなるべし任せ自ら第一の富
貴の家に生れ飽暖の中に育て卜情に疎れば功を稜も拳を常とも為せ
ず仍人を使に恨を懷く恨をいだけて変に陥て俄に耳言を如何為虚情と為て豈
服せんや故に事を為すに功一労をも空変に帰せざる勿れ是を胡越と云て嫌ふ犬
羊語と北心を順史に忘へ次に敵徐を[illegible]
○武田信玄い歌を拙く術に長しるのに縁を治国安民の事も作られ賢[illegible]
強い他国を伐れても[illegible]地を将士の知に賜る事なく甲信の間に於て民も

行たき地も肥たる所を新地賞にあてゝ新に得る所を青比助蒲小畑伊勢
五人と那代とし紙筆を以て採民のまを專にせしむ故に終に一揆を企つ
もと信玄一世の間いまだ入国不國民比再い叛逆ろい所主將の人愛に心を
用ひ也

○先功の士の曰高坂源正信玄を養て古今稀成名將の如く書ろう今武田流の
軍法を伝ふ偏見頑習しも楠正成も侵れて思ひ出ず天地遠隔同日比
論い有ろう楠子のみる氏を亡されるい上ヨ時君ましまして絶倫の忠義希世の
良策もいろいろに第し故あり更ヨ比倫もろ人傑に非す信玄をしも楠子乃
代ヨ遇いし先い必ず氏を敗し逆臣ろう義時ハ弑簒の志を逞ふ上ヨ
ろれを天倫自然の父子の間ろ冠履の如し況時君に仕へ奸臣操を立や
逆を後て勢て見ろ如し信玄子義信も親の元悪ヨ倣て信玄を害せんと
父子親名を忘れ義を捨て復讐ろ楠子数代の烈忠ヨ比ら見ろ上豈逆臣
ろう非や去れども其志を論しろ罪ろ倫まる非と見ろ人もあるべきなり論

輪の根本全く爰に於ろ孫子將の術を論ろ小智信仁勇義ろ楠子無
不患不惑不怨の生質の美有て勤め行ひ初め学ひ聖を知ろ智仁勇に恢ふ
人也事ふ能ふ信を以ろ用ひ歳也治世の補弼乱世の將帥和朝に於て古今
誰れ也ろ並ん信玄ハ智ろも邪智ろ故ヨ武威ヨ懼れ骨髄ろ徹て実に
服ろる非ろり楠ろして封ろ爰ろ人信玄に服ろんや信玄ハ義勇有て
仁信ろ厚い項し剛の如し項王の義勇ハ漢高に勝れも漢高の仁信ろ項王
坂下の敗衂ろいに況楠と信玄ろや義勇ハ勝劣ろ上ろ仁信ハ楠ヨ有ろ
信玄ヨ更ニ劣し比倫ろの分暗し楠ヨ霊魂ろ此説ろ聞ハ
地下に恨有ん古今勝負の事ろ説に徳ハ才ヨ勝ると信玄材力
ろも徳有ろ事ヨ同し時代ろ論ん評ん弓矢ハ強信に取勝ろ事
云ふの道て有ろ其所以ハ武田上杉の大軍ヨ孔の信濃全国信玄の手に入を設ん

を一概の説まゝ信しゝ〻信玄ハ信濃ヲ伐取ゝ〻されも住國ハ働又不能是故ニ信濃を
取ゝ年を雪用とし謙信ハ度〻ゝ一旦村上を頼れて信玄ハ働くしい所なれ
信州を要ゝゝを其上越後ハ雪国なれ積〻中旬晩秋との間を信玄ハ兵粮ハ
年一ゝ度二度程を信玄ハ謙ゝ信玄を苦敵ゝ寒天のれも攻戦止ゝ〻一度
幾度ゝゝ無ハ信州の士越後ニ来ゝて甲州ハ注ゝ戦の強弱ハ
非ゝゝ信しゝ也川中嶋の合戦も信玄ハ海汗の業を築〻〻戦ゝ謙信ハ山城を
越て客戦也自ハ信玄ハ永遠ハ敗ゝ強れ共三の合戦ゝ謙信の兵粮ハ撃負
ゝ年ハ郷ゝ具ゝ越後ハの闘死離云合三ヶ余但名有士の討ものハ少し甲州
方の戦没の数ハ高坂忠之ゝ甲陽軍鑑ハ不峯ゝ云〻ゝ実を以ゝ闘死
六七千に及ゝと云ハ〻ゝ此戦に信玄義信倶ハ創を家典硯論角山本
大將ゝの討死多を覚ゝ〻又此戦ハ謙信和田業繁ハ速〻敗ゝれゝ
云も虚説ゝ軍法覇道云五十騎計ゝ引れ善光寺に陣を張ゝ三日而ハ越後ハ
ゝ帰ゝ戦ゝ人ハ俗名且糟鬼弾ゝも一ヶ所ニ居ゝ人数ゝ技ゝ盛ゝ味方ゝ可防
塞も多ゝ野陣を張て三日逗留ゝ〻ゝ信玄又ゝ信ゝ長を不安ゝ家を以ゝ中潟
の軍ハ謙信の負軍ニ非千角成長必ゝ是信越ハ州の古老の士の語ゝ伝ゝる
誠也ゝ記ゝ如ゝ信玄を謙ゝ信ゝに仰ゝ虎たに非其代ニ於ても利元能
以系氏康武田信玄上杉謙信を四將と呼ゝ世ゝ恐ゝ畏ゝ長豪ゝ云れ高坂ゝ弾
云ハ実ゝ〻世を歌問ゝ説ゝ多ゝ其概感ハ解む為ゝ是を評ゝ〻ゝ又信玄
自ゝ謙信を譏て分別ゝ〻ゝ謙信ゝ信玄を分別ゝ云〻ゝ是を長ゝ〻を
以人の短ゝ比ゝ多互に謗ゝ〻ハ性服ゝ〻ゝ保ゝ最小細の論ハ分別の篤ハ
評ゝ生ハの紀振を以評ゝ〻信玄の生涯を不ゝ若ゝ〻父の國を押領ゝ〻ゝ
正ゝ〻嫡子義信を殺ゝ敵將の降服を偽ゝ〻斬殺ゝ其女の容色ニ惑て是ハ
ゝて其後ニ諏訪を出生ゝ〻ゝ遠代を頼ゝ〻ゝ又累代の名字を亡ゝ又七枝跡絶
ゝ後を不知其外の事ハ牧峯ニ及ゝ右の条〻ゝ豈人を多ゝ〻ゝ又分別篤ゝ〻ゝ

殊に危きい敵の女を妻とするを事不敵とや、こゝに早雲氏茂の女の懦成り信玄の幸比
山年の智を不義を不忍非を諫こい倫使のを以を高坂山本を賢者と云信玄
を吟ずるとゝろい何の謂ぞや信玄誠に吟ずるこゝい其邪悪度量大の和術を
用いて戈の方法をこゝ又山本勘助あり降系の武義を不教ノ振方の諸士を懐
術し容易ノ事ニ成ル有ハ武義の女を娶せんとて寵愛の患ふかんと信玄
業い返とくふ審しさんも名よの信玄ハ加様の事を過きるこゝ非を宣てを
時勢に不得已支ずしてこゝ後世人の思ふい信玄い良将謙信い信将を
見ぬれも信玄謙信強弱の系譜を義者信玄の軍い村上に敗れ故軍系此
軍い上杉に敗るる敗北い全くの貪戦を謙信ハ国の軍い其父為系の仇を報ずる
義戦也謙信生涯の間り格別の邪義なるを不聞信玄の生涯ハ果利分ノ揚て
云ふ美ず而を豊良の名なんや早雲を云い信玄軍上を可称人なり

○信玄放討の時柄ある士を（姓名ナシ）若士ふ問答を怒ノ伊勢の類に出勇に
ふ一人ふ得ふ事と相手に抜ずよ切と思ふ早雲也夫ふ多い仕抜ふ物に
又第一い抜ふ斬らあるを也い弱を信玄ふ飛を乗て人を斬ふ者を掛れい
ふ討の敵を見ぬ彼の声を抜ふ其時分ふ者ハ一切ふ者ハ敵の狙ふ者ハ信玄
抜合ふ時を見ふ力を得を却ふ氣付奪れて仕抜ふ物ハ切ふ信ハ計に非を
利方宜し其者後ふ敵を敗あるれい互ふ方ふ〳〵ふ者と云て刀の柄ふ敵抜
見を方也渠得ふ刀の柄ふ見を方ふ〳〵ふ者ハ敵ふ抜く渠ハ抜時氣皆抜渠
皆抜時氣切勢見を方を抜ふ渠ハ方を抜ふ渠ハ敵ふ抜ふ者ハ敵を抜ふ
○甲州の加藤信ふ者ハ嚴流の弟子也信玄家士十二人の使番の内に此使番の指物を
名白の四ふ書ふ馬鈴を書ふ信ふ者ハ指物ハ馬鈴ハ信玄を外ふ者に初
藤云人並に馬鈴を付ふ武者振ハ信ハ指物ハ其指物の氣に一寸ふ鈴を附ふ者
て法を破ふ者と信ふ者ハ信玄笑ふ者ハ又小線十二支に方信玄小田原城へ

発向の時信秀より具足羽織二香車の二字を書信玄振舞ある事を聞き奴ども申しける折
柴小四郎酒肴の川水場にて誠々ものしたる初鰹生魚五六本ありて漁師に問ひ
川を渡る武士初鰹の問て曰香車なるべし再い問ひ時信秀の羽織を
裏返し見せんと裏に香と云字を附置きたりとぞ
○毋羽寺の事ども秀吉信長の老臣なり羽柴一国并江州の内滋賀郡を領ス
居城は長浜と号す信長公生害の後秀吉に属天正十一癸未四月廿四日柴田勝家滅
亡の後は越前一国に加賀の内二郡加へ七十万石領の領地を秀吉揚越前小の庄の
城を居同三年辛酉子長吉寿丸と号ス長重出羽守と称ス
作内蔵介成政と一味ノ秀吉に逆ふ故十二月越前を没収加州松任五万
石に減ず後其後五万石場地十万石ヨリ同国小松城を賜ふ但実ハ京以後の
事ハ編纂に載ス仍略ス
○森蘭丸ハ森三左衛門可成二男勝蔵長一郎ヨリ信長の小姓也直ヨリ編纂
ス其志最忠烈ヨリ或時信長ヨリ蘭丸勝利を持ち尾張を伺ふ和
左衛門ヨリ獅子の刻銘刀を刻の数を等へ居ル信長公寝ニ是を見給ハ少し
後ハ御ヨリ夜話の内ヨリ此銘の刻の数を云南ヨリ多ク問ふ数
を数ヘ中ヨリ中ニ蘭丸ハ黙然として是を不云信長是を問ふに果ハ兼て
中信長ヨリ厚恩を感ジ外ハ獅子を蒙丸ヨリ賜ふ也
出給ふ之秀吉命を受時欲ハ旗本として名国ヨリ中ニ蒙丸独ハ敵ヘ
吸習ヨリ中せしも敵中能を十文字槍に用て屋敷門外ニ乱入ル信長公ハ寝
装束を着ル弓矢を負ヒ槍ヲ持ヒ表ヨリ来ル者ハ明智光秀ヨリ流れ矢通ニ手ヨリ奴ハ
一ツ射殺ハと大ヨリ怒ル流石其郷ハ俳易ノ門外又猶孫ヨリ中に安田作兵衛と名乗て
槍を振ヒ突ヒ信長を放ヒ安田の肘ヨリ中ヒ浅創ヒ屋ヒ信長公を利
ントス信長槍を倚ヒ人ヨリを安田逃ヒ槍ヲ刺ヒ利を以て二ツ先ハ安田得ヨリ
やと槍を押ヒ刺ヒ安田を撃ヒの槍ヒ掛ヒ落し槍ヒ

突く豫安四ヶ股の間男根を出し突切り安西を捨てしづかに溝ヶ部に佩刀を抜き
蒙丸を斬り夫ヶ孔軍押入て四ヶ火を放ち後ハ織田家不主と滅亡ス
因ニ此番ハ佐藤後に幸次志戸内に住ぐ平野源蔵と改名て秀吉肥前唐津
八万石を賜ふに封せらるる時廣ふ平野より八子石ばかり其昔平野と廣ふい変也
之に給しかハ今我國に豫之名國郡のなとかく一方ハ十分一を取く家居と成ハ
誓ふ故ニ平野を名乗ハ如何来時もれしとそ
○戸田氏勝 始ハ忠ふと号天正十年壬午三月十八日武田勝頼の金牙仁科蒲伝盛の
養子ニ高遠の城を堅く勝信忠攻ふ時戸田ふ家ハ一番ニ敵
入ふ戸張場の美戸ハ御本ハ戸田ヶ赤縅の甲金の戸竹右の御本ニ掛て居ニ
時を倒れふ後ハ二番ハ続ふ信忠の小性山口小弁作清義戸田を示て一番
乗を渡て戸田に云敵ハ隙ふ荒ふ時ハ一方ハ忘却し一遠ハ之を捨ハ山平家
母衣掛の物ハ敵ふ限ハ心付ふ可し敵ハ勇ふ者ハ前後を忘ふ
是敵ふ類の及ハふ事也と語此武蔵ハ後ハ武蔵守と号関ヶ金義ニ石田三成ハ
世ハ大谷刑部平塚因幡抔と等しく西軍の内ふ隨分の饒将ふ金吾秀秋の
裏新ニ仍討死し首ハ織田河内守長孝取ふ長孝ハ織田有楽の嫡子ふて雲生
寺の兄也敵ふ遠の一番乗ふ山口小弁作清義ハ俱ニ十六歳也清義ハ戦中の
作ふ成敗の物し小弁ハ京南伏見の浪人者の子ふ容顔美敵石兎ふ抱ふ後ハ
小性ふ成清義ハ観世流の能を善ふて小弁ハ小歌の上手ふ共ふ信忠の寵遇ふ
成ふ今度戸田氏を名ふと云大剛の士を乗敵ふ一番乗し殊ふ付ふる名しふふ
信長云大ふ云人ハ云ふ遠ふて今ハ軍戸田氏ふ掘ふ二番ふふ乗ふ
吉義名務兵庫ふを名ふ乗ふ人ふ廣ふ乗ふ之ハ山口小弁を石ふ度ふ遠ふて
の働者代し城ふ動目を不思ハ入清ふ名ふ人ふて自国人の後ふ威ふ
揚次ふ作清義を石高遠の働者ふ名ふ宮ハ源石大剛の内ふ今ハ名と共ふ有
長之の後ふ威ふ家ふ作清蔵 描ハ夫ふ日数二十日後ふ

二条の橋下に信忠公を乃公が討奉る時なる人々お死を手負藏小弁に云乃公が敵と
赤脇さま討死なん事不定の歌と云なる屍の上に打見しを死人なれども人
共に敵中へ突入南歌を討く銘しまゐ死骸を城内へ引込手負をえ友人共に
是を見し又切て出れ軍の中に死を喧嘩小者ども列士成代

○千利休を秀吉公被殺しなる堺鰯い県の娘の事なりと云利休主人の子を嫡子
を居次ハ女子号吟子三男を少菴と云少菴ハ坂書の連歌子なり利休り非実
子此女系湯を善くなるに仍逆て後妻とせり利休娘ハ京師の内侍と申者に
嫁せし夫ハ離れ女未若なれども多く此子供を養育ノ其跡を立貞操を乱さて
居なり天正十八年の春ハ世も静かなれハ秀吉公諸侯の館く成なれ離宮聖おのれ遊
度と可なし然也幼旬東山寺の辺に堂あり東福寺の前を是なり通なり
作法殊勝前度此人未聞ハ外ハ性ハ供ハ自分を居りて細を
見の人夫なる向なる女房を人俗女三人を連立西を跡ハ特に彼竜胆の通男ら
拵乃ち山に此を訪ハ静かに来りを本下ハ動ハ此ハ此ハ扇を上ハ上様の
法成也笠帽子を拵く傍ハ扣ハ呼れを名田の時ハ下ハて踏張を彼女ハ帽子を
拵額俗半ハて裳をハい取ハ高くし可ハ人ハ高ハ秀吉公ハ浅ハ通ハ三十
俗ハ可ハ庶ハ人ハ年ハ歌ハ年ハ三ハ那ハ人ハ夫ハ
不申ハ人を秀吉公聞ハ怒ハ利休ハ宝の宛ハ大徳寺ハ古溪和尚ハ丸誠し
山門を再興ハ棟れを却ハ且ハ利休ハ本係を造ハ山門ハ安置ハ其係ハ已ハ立ハ
姿ハ八徳を五を角ハ中を左ハ投尻切を殿様を突遠見ハ体ハ是を秀吉公聞
事ハ悪ハ折柄ハ宝ハ山門ハ山門ハ本ハ人高位ハ通ハ者ハ是を

已の茶ばかりの事 言語をのべられしと伺ひ奉り利休、高を笑事侍る
なく誇りなく思ひて利休の道を学ぶ者用に誇今紹鷗と申し其子を頂き茶具の自
利を親疎なく私欲を変 中に仍一生の宗匠と云者古来の私有い覓の國滅之
と云外怒沸騰す 天正十九年二月廿八日利休は成敗に究為検使尼子三郎左衛門尉
作法の中村式部少輔利休を竜安寺に向罪の箇条を伺ふ利休敬て
義を一向の小理屈を於弟子宗薫に義法を中村自分に花を中事を綱
切腹仕る 竹林院堂の茶湯間の茶碗石燈籠を細川忠興の方へ形見に進ぜ
自他の茶杓と織筋の茶碗、宗薫に与へ遺言を渡捨切て
果て千時七十一歳也

辞世　人世七十　力囲希咄　吾這宝剣　諸仏共殺
提ゝ底ゆく生の一句を引て此世を天に抛

右、其商如心筆跡ノ一冊ヲ以写之又世示利休辞世ト云一説ニハ利休歌ト思ハレ候 自今ニハ全く誤ニ
秀次依為謀場死ト云

宗薫利休首を生絹に包獨掛、持せて三人の上使に渡す秀吉公聞届給ふ補之
命大徳寺山門に上る本像を引出し利休の首を彼本像に添て一条戻橋ニ
梟首す見物市井男女嬉子を京都ハ荒廃迷惑れ物凄の後亦も
物騒なく成 大菴い京都に居を大政所に伺ふ者を物きれ給ふ
と申られ其子を宗旦と云 宗旦子宗左 宗左 宗旦 幸侍者に生駒主殿に仕 其後
紀州に召抱今の千家此商と右宗薫、遺物に添状を宗易未亡人の茶添也
此織筋茶碗細工の茶杓形見なり 利休判
右、宗薫伝を所持スト云

○坂崎出羽守 潔秀政の長男 坂崎内匠頭政 二男三十郎半 寛永最英蘭なれ
陪臣のよろ十三歳ヲ 秀吉公此事性を不愛れ罪過為ケ名を改られ丹後
ち直孝と号 或時公女中方四五人を連れ数寄屋、入られ炉を立て茶をのみ

処より利休の七碗多能と弘られ其形新々
公の面の上炭を見る毛眼中光々て呼吸の大氣を出て女中迄恐怖
此例より作り秀吉心用と炭を並給へ利休を招て覩て座中を叱り
平座しの家炭を見るの毛飛推来の為也と大に叱り給へ其猛威に慴れ
ゝゝや少退るの床の花に居た秀吉公を掛絵静に此坐の間、既も給女房
達い公方えく逃去叔秀吉公此性を石堀丹後守時に家政の名に應ず彼を
秀吉宮ひきの利休の迷惑叔寄に在て体毫を飛し汝徒て此ゝ毛作
冊ゝ畏り叔寄屋、徒て廊下の窓を外明る知を塞給へ叔寄屋に行見に
伺者も無し利休ゝ毛給ゝ毛後ゝ上れも公感し給へ紫の前織を下され
○家康公 御氏名の後八中る不及恐ノ義理源ゝ実将ゝ毛晋三郎 号青
此生涯の頃ゝ後の今川義元の屋ゝ給へ義元の姪関口刑部大輔親永の女
紙山及ト号 号信三郎 信康母 元服 ゝ嫁ゝ給れ此元服の時い義元の一字を此給へ有て元信と
名系ゝ又元康と改め給ゝ後此筋目を給ゝ毛御恵給ゝ義元の子氏実源
容し故ゝを一生此疎略不ゝ家此扶助を又義元討死の場所ゝ尾州桶狭田架の
家を廃野ゝく此通ゝ毛時いつゝく毛れ下馬ゝ小牧長久手の戦ゝ世間く
知知の義強し後ゝ大御所ゝ奉称ゝ毛ゝ此義元ゝ武田信玄
の息女賢性院御目見の時いゝ毛ゝ此後を乃ゝ毛給ゝ此時義方ゝ大坂御陣前年
後府ゝく此ゝ聖の学問の往来ゝ此下馬を青々一寸松中有棟梁姿後
世可懐此ゝ後ゝ如何来知識ゝ毛故ゝと上意也上杉京弥抔ゝ御達叔時
此薩を興ゝ乃ゝ毛給ゝ毛ゝ元来官領家ゝ其上元亀元年庚午七月ゝ又上杉
謙信ゝ伝を給ゝ此ゝ氏ゝ取ゝ毛ゝ毛上村子三郎中川市助此使を
上杉家ゝく村上源五郎国清 家清之子 川田を前ゝ毛親ゝ毛を執を此家ゝ於ゝ松平
変ゝ毛来石川日向家来義ゝ此互ゝ書簡往来叔寄乃上ゝ毛支桐聲ゝ右
謙信の書牒今ゝ極村家ゝ伝 松平和泉守 石川ゝ後此家ゝ在元亀二年九月秋場

山権現堂如納坊と云山伏共ハ無谷小次郎を討捕り鎌倉へ入魂の事を度々
申ス不絶係り申候を関東陣の者ハ謀叛の張本と疑ひ
寄免とそれ子孫ハ相続をいたし所以なり　少し
○伊賀右京亮　義宣ハ東野舟橋ハ頼朝公の士　武蔵の国四幅掛の四郎
火車と書　京ハ陣中時ハ上杉四郎　丹波大将軍　今川　南条
薩摩義宣を羽黒秋田　元弓を伊賀伊勢信濃
伯耆　長谷川左衛門を殺を義宣ハ伏見に成　於諸侯列座　多上座を
給ふ　是領知十八万石　減ぜ候　伊賀　義宣　義長　生涯　信濃守　小田
色を秋田　義若　結搦　及ぶ　時　誅罰　右の　老父
義重　ハ　ハ　英門秀康　三万余の人数　敗　敗　伊賀
以下　発向　車　丹波父子三人　舟六隻混雑　義重父子の　飯塚を待
新庄三郎　以来　相伝の　領を他　渡　口惜　恥　軍　同意
ハ　呼　城　入　大　門外　以下　大勝　取囲　生捕
縛　火車の　捕　縛　晒　家康　呼　少　車野　義
勇を最嘆賞　捕ふ
○嶋津義弘ハ軍勢の高名　世の知る　右矢将軍　相州ハ三子を　軍勢を　実　相州の
御量所　紫　時政ノ女　号政子ノ前　同胞の末子也　嶋津家　忠久ハ軍勢忠久ハ　判官
義経の妹　丹後　句　紀久　量所の嫉妬　大事　丹後の局を
懐妊の内　鎌倉を通り上方へ　忍　摂津　宿を借　唯
様子を聞者　怪　宿を借　折　大友陣　前後を　弁　利発氣附
詮方なく　住吉の社の瑞籬の傍成　石を　腰を　居り　忽　孤　火を
主を　平産　男子の生を　行末久也　干時治承三　己丑三月　今ハ　其石を
石を号　又住吉に　稲荷社を　修復　稲荷と　祭る　北条氏　其後　丹後局
を鎌倉に　故　忠久も　後父の氏を　如

建久七年八月忠久ニ薩摩国を給ふ忠久是を拝任して西国へ下るとて京師へ立寄
近衛殿へ参りしかハ其時近衛殿より源姓を賜 当時彼家にハ源姓ヲ用と見へたり可追考 又家紋の事ハ
其時頼朝公より旗幕を賜る旗ハ地白ニ黒十文字幕ハ地かちんニ白き十文字也夫より是を
家紋ニ定むと云

○豊後国城井弥三郎鎮房大剛士にて城井谷の要害ニ籠居して領之地威旅ニ従
はさり仍秀吉公より黒田如水へ内意を加へ方便をめくらし城井か女を甲斐守長政か
妻ニ娶て入魂に城井を呼て其坐にて長政自ら鎮房を討果す長政此小姓
吉田村長三郎十二歳にて二の太刀を打城井か従士切入しを黒田家臣衆
井上周防後藤又兵衛以下被官の装束も上下にて槍追而彼従を悉く平らけ
鎮房か鎧ハ秀吉の命ニ仍鎮を掛り後藤ハ彼勧の中にて至るハ昔の槍も多
くれ共長持の槍ハ今も始めんと笑ひ皆人聞に驚くいそうし紀中にての戯れ
流石勇者の後藤又兵衛と誉てし長政の家宝家此事を少しも不敢 中々にきいて
捨ぬるものかなハ誰の儀ん存したるの比上と書ありて十九歳にて自害せしもの也

○落合清左衛門井上三郎兵衛と申す人ハ皆上杉家の浪人にして一人の物語に云信玄謙信川中
嶋にて太刀打せられしハ天文廿三年甲寅八月十八日の合戦にて御幣川の河中にての事也
其時武田典厩の鞍役を見て信玄也と思ひ村上義清是を渡合て組討たる皆十七度の
合戦の内十一度ハ謙信勝六度ハ信玄勝と其夜信玄ハ退散謙信ハ翌日引きにける
又翌年弘治二年丙辰三月廿五日夜謙信筑摩川を渡りて信玄の旗本を追破り板垣
駿河守一条六郎小笠原民部少輔角兵衛山本勘助初鹿源五郎等を討取る又に
甲州先手飯富兵部少輔保科弾正忠田一徳斎其一万余人戸神山より足軽謙信の家臣を
攻る依て謙信ハ川を渡て引退く翌廿六日信玄謙信も共年日中七度信玄ハ付
翌廿七日桐川にて上杉家中也度の合戦ニ討死せし者の忌日年号月日分明也
永禄四年九月十日川中嶋合戦と云事上杉家にハ沙汰なしと物語りき

○黒田長政常に語られしハ我十四歳の自七年病に多名度とに及ふとも虽名かしあふ有切の

如水子孫にて父の年の様に見て家氏を称する人々に浅野幸長を以て天下比類無
有と称し幸長の父幸長乃父弾正に分別方を以の事一世称賞せられ一生行う武
勇多比人也と云ふ

○高麗陣の時駿南大門の合戦に大明勢如松の三十万騎と小早川隆景の二万余騎と
比戦し初め如松を其惟忠張飛爵と十万余騎山海関を出て明保に渡る
朝鮮文小西摂津守行長大将に申大村新八郎浦刑部法印宗対馬守一万八千
余騎を指て平壌城を攻破小西を進て朝鮮の都を指て押寄る朝鮮の
軍勢死如つて三十万と宋大友義統に嗣山城に至て罷退て義田義と
久留米侍従秀包に白川と襄陽を生小西大友に北城に為る小早川隆景に開城府に
生都合に五里隔て三ツ大河を隆景に所に毎の大軍に対し死戦をせんと踏
止られを惣大将備前中納言秀家兵石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛大谷刑部
少輔吉隆の三手に分て軍使を以早く都に可引れ大河間に隔て難義と
被仰隆景一田兵衛尉に家康に渡海の始を再元飯胡の心に中胡兵に飯しを
左手も是の上に死んを常に悔しを幸に
最生涯是れの時に強合に死戦を快と家康死に共日本の弱をまを
英氣発揮を迎合られて大谷吉隆に一騎開城府に来隆景に謂て云道答
に云に於ては惣代を貴将を失しに後日の軍に何と成を唯在て王城に
飯想軍を備に中を迎に戦を快くせる一向に諫れに隆景と云に
中辺の旨に隆に云に云の詳の後を何時に某に場に入や此辺拝客に
可引と大谷吉に備に敢に他の意論を云に堅く絶に白川城に至面
長政に是を通られに長政に久留米小西大友と一所に開城府と引来る吉に諸将一統に
王城に引合是矢張二月十五日の事に扱隆景一紙に右の形勢に城に不入
南大門の外碧蹄館に陣に同十六日明兵廿万騎夜中に川を渡都に押寄に
巡番に隆景の相備に近に隆家義に家光十時備に五百余人暁に

きりに雲如松大軍の押来るに暗紛に紛れて立花勢思ひ寄らぬの
事其上小勢なれば散々に敗散する所佐竹方の端武者血戦して不敗討死を雑人
四五人猶く死敗て北方を指く宗茂も不敢相援隆景兵毛利七郎元康之勢
米秀包之勢紫の面々指給れて隆景分王塚へ注進仍中納言秀家兼
三郎の軍方門へ死者夜と早明く遠く見渡す雲如松大軍一里計向の備
を除くの外唯今迄の氣色なり其勝潮乃張り如くなる二里余に廣り
勝子波打て騒し昔中こゝ方々秀家も三郎も北大歌を立て形合戦い
不可叶一先都城に引籠り防戦の術を思設と有て立花宗茂眼を付
き眼前の敵大事也と爰を引き籠城せん事勇士の取る所偏に軍戦
運を天に任せんは不如と遂て彼申に仍合戦は完る扨諸将之面々に
至先達て小早川隆景に先陣の約有ける隆景は之義仍手備を
定て一乃先鋒四番の備に組頭村上弾正野溝掃部を副人数三千二の之井上
左衛門尉組頭佐世覚吉見大蔵人数三千三番に隆景旗本人数一万六備立
宗茂久留米秀包毛利元康六子余い奇兵として隆景の右北方三町計隔て
備へ相合戦始る立花を散々に敗兵男を鎧の大軍なれい巧の雲如井上
既に押寄れを立花宗茂時分を待て雲如松旗本へ鬨を叫び挑を入れ
時分を見て攻め懸る処を隆景正面を除て左先に成て四軍右往左往に乱れ
無数軍と雲如三万八千隆景一度に討取る隆景宗茂の手柄を中も
愚也北時宗茂を冒附の首小直元の高名小鞍の塚に つ多り馬も
朱ケ多て元多静小門也雲如雲如四番の備の前を通る組頭村上弾正
野溝掃部を呼付今日い立れ乃義処を推立て雲如雲如少も敗を之い
立る事も立る事も返る事も直る所備い今日此合戦の巻に敗北者
少人雲如の参城参る事宗茂を隆景の本陣へ系具体を隆景見て
立た立事を参られて立近寄る毎事仕あと直を紛れ自慢なり

其場まで聞しに人の語りぬる

○此時会藩来援する時に黒田長政は一隊歩士七八人連れ隆景の旗本に来る

隆景見之長政を呼付人も心元なく思ふ

井上平左衛門を呼付人も心元なく思ふ

平左衛門之長政に対面の式に乗馬井上平左衛門指揮を乱し敵中也長政勇ましく馳し来る頃三月

廿六日辰刻と相詳に言国中に言ふ大方の長政は大編帽子を冠り

歩士は持せ[illegible]先に立て編帽子を被冒り水牛の

立物也水牛北角本と称す華麗なる隆景の士卒も見之長政之を出

上意今日北軍に勝ちと雖も此時長政二十五歳未壮年に不満しかも勇敢人

武を許さる事尤時に可なる変を測知無し長政常に申されしを立物

指物を海老と称する指る中に働く能に滑く抜き為ぬ

立物一定に可なるまでも定を的事皮を張付るとも地自らの大水牛

の立物も皆皮を張付るを見る人の語りぬる

翁子巻之三十

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan